

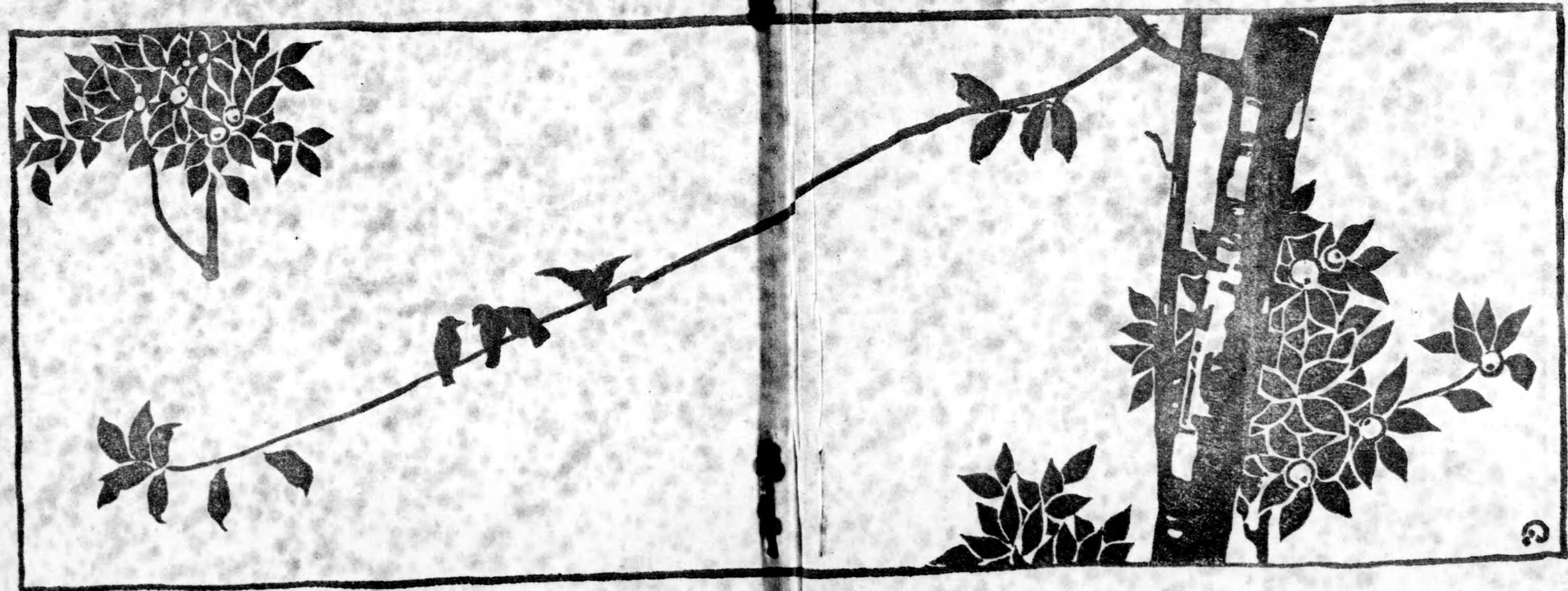
269
639



始







特102
576

故事
俚諺
教訓物語



森脇紫運著



特102
576

故事
俚諺
教訓物語

森脇紫逕著

大正
1.10.11.
丙寅

はしがき

或る人曰く

「賢人とは賢き日多くして賢からぬ日少き人也。

愚人とは賢き日少くして賢からぬ日多き人也。

凡人とは賢くもあらず賢からぬにもあらざる日多くして、時に或は賢く、時に或は賢からぬことある人なり。

賢人も實は愚人もしくは凡人たる日あり。

愚人凡人も實は賢人たる時あり。

愚人凡人の其の實賢人たる時に於て、たましく道破し叫出せる短き教訓は俚諺として世に傳へらる。

魚は魚の舉動を解し、鳥は鳥の言語を解す。

愚人は愚人を解し、凡人は凡人を解す。

一切の人は皆愚人なり、皆凡人なり。若し人ありて我れは愚人にあらずといはゞ、其の人は既に眞の愚人にして、又人ありて我れは凡人にあらずといはゞ其の人は既に眞の凡人たればなり。

基客はその技倆自己と相距るこる遠からざる人のたましく案出せる奇策妙計に對して、能く之れを解し

且つ能く之れを喝采するものなり。

我れ等は我れ等と同階級なる愚人凡人のたまたま我れ等に與へたる教訓に對して、能く之れを解し、且つ之れに感服す。」

と。然り實に俚諺の中に含蓄せる詩趣頓才のいかばかり富饒なるか、又譬喩諷刺の如何ばかり輕妙なるか、教訓のいかばかり適切なるか、而もその語や頗る簡にして、普通人生の教科書ともいふべきものなり。而して故事も亦之れに似たる譬喩を有し諷刺を有しかつ詩趣を有するものあり。

故事 教訓 物語

本書 目次

▼ 惡事千里を走る	一	▼ 狗猛くして酒酸し	一〇
▼ 飽くまで食つて寝れば牛になる	二	▼ 息の香の臭きは未知らず	一〇
▼ 粟飯炊ぐ一睡の夢	二	▼ 醫者の不養生	一一
▼ 頭かくして尻かくさず	三	▼ 急がば遅れ	一一
▼ 羹にこりて羹を吹く	四	▼ 石にすゝぎ流れに枕す	一四
▼ あまり圓きはころびやすし	四	▼ 一に看病二に藥	一五
▼ あまり茶に福あり	五	▼ 一富士二鷹三茄子	一五
▼ 青菜に塩	六	▼ 一指目を蔽へば太山も見えず	一六
▼ 青は藍より出で、藍より青し	六	▼ 一杯は人酒を飲み、二杯は酒酒を飲み、 三杯は酒人をのみ	一七
▼ 怒れる拳は、顔にあたらす	七	▼ 犬骨折つて鷹の餌食	一七
▼ いつばうの争	八		

今俚諺及び故事の通俗なるもの數百を集めてこゝにこの書を物しぬ。世の少年少女のため、又青年學生のため、一は娛樂的の讀物たらしめ一は處世の教訓たらしめんとする目的に外ならず。その一部の目的だに達しなば編者の幸これに如かざるなり。

大正元年九月下濼

柿の實の色づく日

紫 逕 生

本 書 目 次

▼言ひたい事は明日言へ	一九	▼蕪雀安んぞ鴻鶴の志を知らんや	二八
▼牛にひかれて善光寺参り	二〇	▼閻魔の掬からを嘗めたやう	二九
▼牛の尻	二一	▼落武者芒の穂におそれる	二九
▼牛は水を飲んで乳を吐き、蛇は水を飲んで毒を吐す	二二	▼お鬚の塵を拂ふ	三一
▼うそをつけば閻魔に舌をぬかれる	二三	▼親をにらむと蝶になる	三一
▼内股膏藥	二四	▼親善子樂孫乞食	三三
▼鶴の眞似する鴉水におはれる	二四	▼郷に入つては郷従へ	三四
▼馬の止動狐の困快	二五	▼隠すより現はるゝ	三五
▼梅は食ふとも核食ふな、中に天神寢てござる	二五	▼賢ければばげよ	三五
▼梅を語れば口中醉を生ず	二六	▼稼ぐに追つく貧乏なし	三九
▼飢ゑたる犬は棒を恐れず	二七	▼可愛子には旅をさせよ	四〇
▼得手物で仕損する	二七	▼金牛を嘔りて路を開く	四二
▼蝦魚で鯛つる	二八	▼窮鼠かへつて猫をかむ	四三
		▼杞憂	四四
		▼狐を馬に乗せたやう	四五

本 書 目 次

▼金時の火事見舞	四六	▼弘法も筆のあやまり、後も木から落ちる	六〇
▼管の穴から天のぞく	四七	▼胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふ	六一
▼口が杯と親しくなれば身代は貧乏と親類になる	四七	▼黒牛白犢を生む	六二
▼君子は危きに近寄らず	四八	▼寒翁が馬	六三
▼愚公山を移す	五〇	▼酒と朝寝は貧乏の近道	六五
▼會稽の耻	五二	▼七を投げる	六六
▼臥薪嘗膽	五三	▼竿竹で星を打つやう	六七
▼華胥の夢	五三	▼三人よれば文珠の智慧	六八
▼管鮑の交	五四	▼死ぬ死ぬいふ者に死したためしなし	六九
▼下戸の建てたる倉もなし	五六	▼鹿を追ふ獵師は山を見ず	七〇
▼支田牛一	五七	▼鹿を馬に通す	七二
▼鯰をおとして舟をきざむ	五七	▼仕事幽霊飯辨慶、その癖夏瘡寒細り、たまさか肥えたるはれ病	七三
▼荊公の字を解くが如し	五八	▼四知	七三
▼螢雪の功	五九	▼七歩の才	七四

本 書 目 次

▼ 虱の生ずる所を争ふ	七五
▼ 白川夜船の奇駭	七七
▼ 節儉は臭い	七八
▼ 炊臼の夢	七九
▼ 夢は穢鬼にさらせよ、筆は鬼にさらせよ	八〇
▼ 船頭多くして船山へ上る	八〇
▼ 樽檀は、葉より香し	八一
▼ 絶纒	八二
▼ 竊鉄の疑	八三
▼ 精衛海を填む	八四
▼ 蘇民將來子孫	八五
▼ 曾参人を殺す	八七
▼ 宋綏の仁	九〇
▼ 素車白馬	九一
▼ 蓼くふ虫もすきぐ	九二
~~~~~	
▼ 橙が赤くかれば醫者の顔が青くなり、 橙が青くなれば醫者の顔は赤くなる	九四
▼ たつ鳥あとを濁さず	九五
▼ 旅の耻はかき捨て	九五
▼ 道傍の苦李	九六
▼ 地獄の沙汰も金次第	九七
▼ 月夜の道徳坊	九九
▼ 強き木はむす折れ	一〇一
▼ 使ふは使はるゝ	一〇二
▼ 月にむら雲花に風	一〇三
▼ 朝三暮四の術	一〇三
▼ 田單の火牛の計	一〇五
▼ 天から横に降る雨はなし	一〇六
▼ 鄭家の奴は詩をうたふ	一〇七
▼ 亭主を尻にし	一〇八

本 書 目 次

▼ 出遣より小遣	一〇九
▼ 手習は坂に車を押す如し	一〇九
▼ 出る杭はうたれる	一一〇
▼ 同病相あはれむ	一一一
▼ 時にあへば鼠も虎となる	一一二
▼ 齋のやうには鼻さへそぐ	一一三
▼ 處かはれば品かはる	一一四
▼ 年が薬	一一四
▼ 年よりの言ふ事と、牛の尻がひ外れた 半なし	一一五
▼ 隣家の花は赤い	一一五
▼ 遠き慮なきものは必ず近き憂あり	一一六
▼ 燈消えんとして光を増す	一一七
▼ 處行ぬ玉作り	一一七
▼ 虎の威を借る狐	一二〇
~~~~~	
▼ 十で神童十五で才子、二十過ぎては たゞの人	一二二
▼ 問ふは一度の恥、問はぬは未代の恥	一二三
▼ 泣き面に蜂	一二四
▼ 啼く鹿も夢のあはせのまゝに	一二四
▼ 南郭濫竽	一二五
▼ 南柯の一夢	一二六
▼ 無い／＼言うて有るものは虱、ある／＼ 言うても無いものは成る化物	一二八
▼ 長いものには巻かれる	一二九
▼ 無いもの食はうが人の病	一二九
▼ 泣く口は食はれるが、笑ふ口は 食はれぬ	一三〇
▼ 無くて七癖	一三〇
▼ 情に向ふ及ばし	一三一

本 書 目 次

▼夏の火は娘にたかせよ、冬の火は嫁にたかせよ	一三一
▼七度たづねて人を疑へ	一三二
▼二卵を以て干城の將を捨つ	一三二
▼逃がしたものは大きい	一三五
▼憎い鷹にも餌を飼へ	一三五
▼錦の袋に糠味噌を包んだやう	一三六
▼日光見ないうちは結構さいふな	一三七
▼二兎を逐ふものは一兎を得ず	一三七
▼盗賊の取り残しはあるが、火の取り残しはない	一三八
▼盗人に鍵	一三八
▼盗人にも三分の理あり	一三九
▼念力岩をも通す	一三九
▼念佛深眼、禪天窟、眞言亡國、律國賊	一四一
▼寝てみて牡丹餅食へぬ	一四一
▼能ある鷹は爪をかくす	一四二
▼能なき犬の高吠	一四二
▼つけて通せ酒の酔	一四三
▼呪ふ事も口から呪ふ	一四四
▼祖母育ちは三百文値が下がる	一四五
▼盃中の蛇影	一四六
▼亡羊の歎	一四九
▼齒墜ち舌存す	一五一
▼伯強の戒	一五三
▼鼻の下の長い者は長息する	一五四
▼白龍魚化して豫且に制せらる	一五六
▼背水の陣	一五八
▼坊主憎けれや袈裟まで憎い	一五九
▼馬鹿と相場には勝てぬ	一五九

本 書 目 次

▼馬鹿と鉄はつかひやう	一五九
▼帚をまたぐれば難産する	一六〇
▼坊主の櫛貯	一六〇
▼バクヤの劔も持手から	一六一
▼走る馬にも鞭	一六二
▼蜂の巢のこはれたやう	一六三
▼尾生の信	一六三
▼鬚を染む	一六四
▼人を呪はゞ穴二つ	一六五
▼彼岸すぎでの夢のこやし、三十過ぎての男に意見	一六七
▼人ある中に人なし	一六八
▼河豚さげて井戸覗く子を叱る	一六九
▼鮎の念佛	一七〇
▼不信の龜は甲をわる	一七一
▼傳粉の疑	一七五
▼武陵桃源	一七六
▼河豚は食ひたし命は惜し、	一七九
▼武士の子は響の音で目を覺まし、商人の子は算盤の音で目を覺まし、貧乏の子は錢の音で目を覺まし、乞食の子は茶碗の音で目を覺まし	一八〇
▼嫩にして絶たざれば斧を用ふるに至る	一八〇
▼太いものには呑まれよ	一八一
▼平家を亡ぼす者は平家	一八二
▼瓢箪から駒が出る	一八三
▼蛇さなつて金を守る	一八三
▼瓢箪で鯉押へる	一八四
▼細うても樞の木	一八五

次 目 書 本

▼ 棒ほど願うて針ほどかなふ 一八六
▼ 譽める人には油断をすな 一八六
▼ 蔭かぬ種子は生えぬ 一八七
▼ 曲れる板には曲れる影あり 一八八
▼ 馬子にも衣裳 一八八
▼ 参る所の多きに山上参り、食べ物
多いに河豚汁 一九八
▼ 孟母機を断つ 一九〇
▼ 孟母の三遷 一九一
▼ 身を漆し炭を呑む 一九三
▼ 味噌の味噌くさきは上味噌にあらず 一九五
▼ 見ざる聞かざる言はざる 一九五
▼ 水鏡を見ると愛嬌が落ちる 一九六
▼ 水は方圓の器にしたがふ 一九七
▼ 見ぬ化物に膽をつぶす 一九七

▼ 娘一人に七藏あけた 一九八
▼ 紫は朱を奪ふ 一九九
▼ 飯粒をこぼせば盲になる 二〇〇
▼ 盲人蛇におぢず 二〇〇
▼ めうがを食へば馬鹿になる 二〇一
▼ 元の木阿彌 二〇二
▼ 山に千年海に千年 二〇四
▼ 猛虎籠にある時は尾を振て食を求む 二〇五
▼ 餅腹三日 二〇五
▼ 餅は餅屋 二〇六
▼ もず勘定 二〇六
▼ 物はいひやうで角がたつ 二〇七
▼ 燃ゆる火に油をそぐやう 二〇七
▼ 門徒物知らず、法華骨なし、禪宗銭なし、
淨土宗情なし 二〇八

次 目 書 本

▼ 横野の雉子夜の鶴 二一八
▼ 兇暴は貧から茶は罐子から 二一九
▼ 蔵から棒 二〇九
▼ 養老の泉を飲めば老人も若やく 二一〇
▼ 夢に歸つて詩を見る 二一一
▼ 雪の翌日は裸虫も洗濯 二一二
▼ 雪道と魚の子汁は後はどよい 二一三
▼ 遊女の誠と卵の四角なのはない 二一四
▼ 油断大敵 二一四
▼ 夕立は馬の背をわける 二一五
▼ 夢に牡丹餅 二一五
▼ よい時は馬糞も味噌さなる 二一五
▼ 用ある時の地蔵顔、用なき時の
闇覽顔 二一六
▼ 夜があげたら巢を作らう 二一六
▼ 能く泳ぐものは能くおぼる 二一七
▼ 夜半に嵐あり 二一八
▼ 夜目遠目笠のうち 二一九

▼ 弱身につけてむ風の神 二一九
▼ 横紙破り 二二〇
▼ 餘桃 二二〇
▼ 落筆蠅を點す 二二二
▼ 明柯 二二二
▼ 來世の事を言へば鬼が笑ふ 二二四
▼ 老婆心 二二四
▼ 樂は苦の種、苦は樂の種 二二四
▼ 劉宗周口を慎む 二二五
▼ 林蘊の磨頭 二二七
▼ 流水腐らすくるりむしはます 二二八
▼ 李下に冠を正さず 二二九
▼ 綸言汗の如し 二二九
▼ 龍のあざまの珠を探るやう 二二九
▼ 林中に薪を賣らず湖上に魚をひき
がす 二三〇
▼ 梁上の君子 二三一
▼ 良薬口に苦し 二三一

▼ 類を以つて集まる	二二三	▼ 藁千本あつても柱にはならぬ	二四四
▼ 瑠璃も玻璃も照らせはわかる	二三四	▼ 笑ふ門には福來たる	二四四
▼ 累卵よりも危し	二三四	▼ 猪武者	二四五
▼ 遠東の豚	二三四	▼ 舟の中の蛙	二四六
▼ 魯酒薄くして邯鄲圍まる	二三五	▼ 猿猴月をさる	二四六
▼ 我が頭の蠅を逐へ	二三六	▼ 笑の中の劔	二四七
▼ 我子には目がない	二三七	▼ 遠慮ひだるし伊達寒し	二四八
▼ 伶俐なる頭には閉ぢたる口あり	二三七	▼ 男の心さ大黒柱は太い上にも太いがよい	二四九
▼ 禮すぐればへつらひさなる	二三八	▼ 驕るもの久しからず	二五〇
▼ 恰憫貧乏	二三八	▼ 岡目八目	二五〇
▼ 醜を得て蜀を望む	二三九	▼ 尾をふる犬口たゝかす	二五一
▼ 論語よみ論語知らず	二四〇	▼ 斧を磨いで針に作る	二五二
▼ 論より證據	二四〇	▼ 小田原評定	二五四
▼ 我が家の佛尊し	二四〇		
▼ 我が刀で首きる	二四一		
▼ 若木の下で笠をぬげ	二四一		
▼ 我が田に水引く	二四二		
▼ 我が身をつめつて人のいさぞ知れ	二四三		

目 次 終

故事 教訓物語

▼ 悪事千里を走る。

よい事は人に知れにくいものですが、悪い事といふものは、とかく人に知れ易いものです。何かよい事をするに、自分がこんな善い事をしたのだから嘸かし人が知つて居てくれるのであらうと、鼻を高くしてゐても、人はそんな事は露ばかりも知つてゐません。それに何か悪い事でもあるといふと、人が知らねばよいがと思つて、ひやひやしてゐるのに、遠い處の人までがそれを知つてゐるといふやうな事は、多くある事です。

マッシンジャーといふ人は『悪い噂は燕鳥のやうな翼をもつてゐるけれども』

森脇紫逕編

善い樽は杖をついてゐるといつてゐますこれは悪い樽は燕のやうに早く遠い所までゆくが、善い樽は杖をついてゐる老人のやうに、人に知られるのがおそいといふことで、この諺おなじ意味です。

▼飽くまで食つて寝れば牛になる。

人が、たくさん御飯をたべて寝たからといつて、牛になるものではありません。食物を多く食べたあとで、ごろ／＼横に寝たりなごするやうな、無作法な事をするものは、からだは人でも、牛と同じだといふのです。食事の後に臥ぬやうに、子供に教へるための諺です。

▼粟飯炊ぐ一睡の夢。

昔、支那に盧生といふ青年がありました。ごうかして立派な者になりたいと思つて、故郷を出て楚の國へ行く途中、邯鄲といふ處の宿に泊りました。丁度

この宿には、仙人の術を得てゐた呂翁といふ人がゐました。盧生は翁と色々話してゐましたが、だん／＼ねむたくなつて來ました。翁はその時粟飯を蒸してゐましたが、盧生が眠さうにしてゐるので、囊の中から枕を出して、その枕をして寝たらお前の思ふやうに夢が見られるといつて貸してくれました。その枕は青磁で、兩端に孔があります。盧生は夢にこの孔から入つて立派な家に行き美しい女の人を貰ひ、後立派な役にあげられ五人の子が出來、五十年の間あらゆる人生の榮華をきはめ、年八十をこえ病んで死んだといふ夢を見て、欠伸して目がさめました。その時はまだ粟飯が十分煮えてゐませんでした。この事から起つた諺で、人の榮華といふのも丁度この夢のやうにはかないものだといふ事です。

▼頭かくして尻かくさず。

嘘をいふ人は、はじめのうちはうまく話しかけて、嘘と思はれぬ程でも、人を欺すことの出来るのは始めだけで、しまひには隠し終ることが出来ず、どこからとなく、その嘘であつた事がわかつて来るのも知らずに居ることをいふのです。鳥や虫などが、頭だけを隠しておいて、尻が出てゐるのも知らず、自分ではよく隠れてゐるつもりでゐるのにとへたのです。

▼糞にこりて蓋を吹く。

糞は吸物で熱いもの、蓋は野菜などをあへたもので冷いものです。さほど熱くはなからうと思つて、何心なく糞を吸うて、唇をやく程熱かつたのにびつくりし、その後は臆病になつて、冷い蓋を食ふのにさへ、吹いて食ふやうになるといふ意です。『黒犬にかまれて灰汁の滓に怯る』といふのも同じ意味です。

▼あまり圓きはころびやすし。

歌に、

まるくとも一つ角あれ人心

あまりまるきはころび易きぞ

といふのがあります。人が世に立つていくには、温順で、ごく圓やかにして行かねばなりません。何でも彼でも人の反對に立つたり、人と争つたりしたがるやうではいけません。しかしそれかといつて、ごんな事にも人のいふ通り、する通りにしてゐては事が出来ません。どことなく確りしてゐて剛い處がなければならぬといふ諺です。

▼あまり茶に福あり。

昔は、「あまり茶をのまば年がよる」といつてゐたのが、かはつて『餘り茶に福あり』となり、又かはつて『餘り物に福あり』といひかけたのださうです。

或る書物に「あまり茶を飲まば年がよるといふのは嘘である。なせかといふと茶といふ文字は、廿八十八と書くから、歌に、

茶を好きて呑まば廿の人なりと

十八ほどのよはひにぞ見ゆ

といふのがある」と書いてあります。こんな事から出て来た諺で別に深い意味はありません。

▼青菜に塩。

生き／＼してゐる青菜も、一度塩をすると見すばらしい程しほ／＼と萎れてしまひます。それでひゞく勢を落してゐる人のことなどをかういひます。

▼青は藍より出で、藍より青し。

糸を染める青い色は、もとは藍草からとつたものですが、藍の色よりもすつ

と青いものです。それで、師としてゐた人よりもえらく成つた弟子などに言ふ諺で出藍の譽ごもいひます。

俳句にある、

若竹や親よりながうのびにけり

などいふのもこの心です。

▼怒れる拳は笑顔にあたらず。

一方が強／＼ゆけば他の一方も強くあたり、一方がふとなしく出れば他の一方もおとなしくうけるのは人情です。はじめのうちは「彼奴憎い奴、思ふ存分懲らしてやらう」と思つて固めた拳固も、相手が温順しく出て来て、にこ／＼笑顔を作つてゐた日には、勢もどこへやらぬけてしまつて、打つ氣になれません。この諺はそれをいつたものです。つまりぬ事で人と争つたりする人は、この譯

を知らぬ人です。

▼ 鵒蚌の争

昔支那戦國の時代に、趙が燕の國を伐たうとしました。この時蘇代といふ人が、燕のために、惠王に向つていひますには、

『今日私が易水の近くを通りました。丁度その時に一つの蚌が水から出て、貝を開いてゐました。そこへ一羽の鵒が出で来て、蚌の肉を嘴ではさみました。蚌は驚いて貝を閉ぢましたので、鵒は蚌の肉をはさみながら貝で自分の嘴をはさまれました。そこで鵒はいふのに、

『今日も雨が降らず、明日も雨が降らなかつたら、お前は死んでしまふだらう』。

といひました。すると蚌も亦、鵒に向つて、

『今日も出でず、明日も出なかつたらお前は死んでしまふであらう』。

といつて、両方とも争つて、離れませんでした。そのうちに漁師が之れを見つけて、両方とも捕つてしまひました。今趙は燕を伐たうとしてゐますが、趙と燕とは久しく戦つてゐるうちに、澤山の兵士を殺し、多くの費用をつかつて、國が疲れ、丁度蚌と鵒とのやうになつてゐると、あの強い秦がやつて来て、鵒と蚌を捕つていつた漁師のやうに、趙と燕とを亡ぼしてしまふに違ひありません。私はそれが心配でなりません』。

といひました。

この話から起つた諺で、両方が利を得ようと思つて争ひ、お互に敗けまいと
してゐるうちに、他の者が横合から来て、その利を取つてしまふ事をいつたの
です。

* * * * *

▼狗猛くして酒酸し。

昔或人が酒店を開きました。酒を入れる道具はすべて美しく清くし、廣告をよくしましたが、何故かその酒は酸くなる程長くおいてゐても賣れません。色々そのわけを考へても分りませんので村の人に尋ねました。すると村の人は、「あなたの家に居る狗はひどい奴で、人が徳利を下げて酒かひに行きますと、直ぐにかみつきます。それで酒は酸くなるまで賣れないのです」といひました。國にもこの狗のやうな者があります。よい臣があつて、君によい事を申し上げても、すぐそれを悪くいふ悪臣はこの狗の様なものです。この話から起つた諺で、姦臣があつたらその國は衰へるといふ事をいつたのです。

▼息の香の臭きは主知らず。

人の悪い所は目につき易いが、自分のわるい事や短所は、兎角わからぬものです。それは丁度口中の臭い人が、自分でその臭気のあることを知らぬやうなものです。それで自分の缺点や短所はよく氣をつけて直さねばならぬし、人の悪口はうっかり言つてはなりません。

▼醫者の不養生。

人は口ではうまく言ふが、中々行へぬものです。やれ人は働かねばならぬ、骨惜しみするやうではいけぬ。親には孝行をせねばなかな。兄弟は仲よくせねばならぬと、善い事は知りぬく程知つてゐるものでも、兎角おこたり勝ちになるものです。醫者は病人に對して養生を説くけれども、自分はさして養生をせぬことに譬へていつた諺です。

▼急がば廻れ。

心學道話はこんな話があります。

ある處に一人の近道ずきの人がありました。ある時一人旅をした途中、大便に行きたくなりしましたが、丁度その時は十一時頃、今一息で宿まで行けるのに便所へ行けば暇をもられて、多くの道を損ねばならぬ。それかといつて歩きながらやるわけにも行かず、ごうかして近道のし方はないかと考へてゐますうち、だん／＼急になつて来たので仕方なく、道ばたの野雪隠へ入りました。入つてから色々考へてゐますうち、つよいい近道が思ひつきました。それは、今は丁度晝前、今こゝで隙を入れた上、又向ふの宿で晝支度をするに二重の休みになるのみならず茶代も入る事であるから、こゝで今の中に懐中の辨當を食べようと考へたのです。静かに握飯を出して、菰垂の隙から菜種畑を見ながら、悠悠と食べてゐますと、山蜂の大きな奴がやつて来て、尻の邊をぶん／＼うなる氣持悪さに、ばつと蜂を拂つた拍子に、手にもつてゐた竹の皮包が壺の中へ

落ちてしまいました。この人は暫く見つめてゐましたが、横手をうつて『ハ、ア成程これは近道じや』といひました。何故この人が近道じやといつたかと言ふと、飯なれば口へ入れて嚙んだ後喉を通り、腹の中を通つて後やう／＼便所の壺へ落ちるのが當り前、それに今手から直ぐ便所の壺へ落ちたのですから大の近道なのです。而しこの近道は役に立ちません。遠いやうでも通るべき所は通つて来なければいけません。世の中には兎角急ぐ人が多くて近道をしようと思ひます。金もうけの近道をしては相場にしくじり、出世の近道をしては飛んだしくじりをする人が随分あります。

急いで事をしようと思へば、まづよく落ちついて失敗の無いやうに段々に事をやつて行かねばなりません。この諺と同じ意味の歌があります。

ものゝふの矢走の渡し早くとも

急がばまはれ瀬田の長橋

(源俊賴)

急がずば濡れざらましを旅人の

あとより晴るゝ野路の村雨

(道 灌)

▼石に漱ぎ流れに枕す。

負け惜しみが強くて、片意地で己れの非をおし通していくことをいふ諺です。

昔支那に孫楚といふ人がありました。才智すぐれて學問が人に勝れてゐましたが、少い時に、隱居をしようと思ひ、王濟に向つて『當に石に枕し流れに漱がんと欲す』と言はうとして、誤つて『當に石に漱ぎ流れに枕せんと欲す』と言ひました。そこで王濟は『流れには枕をすることが出来ぬし、石では口を漱ぐことが出来ぬではないか』といひますと、楚は『流れを枕にするのはその耳を流はうとするのである。石に漱ぐといふのは石で、齒を磨かうとするのである』と、さすがにうまく答へました。これがこの諺の出来たわけで、流石をさ

る』と、さすがにうまく答へました。これがこの諺の出来たわけで、流石をさすがと讀むこともこの事から起つたのであります。

▼一に看病二に藥。

人の感情といふものは妙なもので、氣の持ちやうで身體はせうにもなるものです。あの醫者はよい醫者だと思へば、その藥が無やみによく利くやうに思ひ病氣も早くなほりますが、あの醫者はいかぬと思つて信用せなければ、その見方もよく藥もよくても、無理に利かぬやうに思ひます。

病人が癒るのは醫藥の効にもよりますが、それよりも猶よく効があるのは看病人です。看病の仕方が病人にとつて第一のことであるといふことです。

▼一富士二鷹三茄子。

初夢に富士山を見たら一ばんよくて、次ぎが鷹の夢、その次が茄子の夢だと

いふのです。このよい夢を見るために、正月二日の夜、寶船を枕の下にしいて寝たのです。このたから船といふのは、寶物と七福神の繪と歌とを書いたものです。

一富士二鷹三茄子四扇五多波姑六座頭ともいひます。

或人の言ふに、この三つの事は吉夢の順序を言つたものではなく、駿河の名物といつたものだといつてゐます。即ち富士山は云ふまでもないこと、鷹は富士から出る鷹で良く、茄子は此國第一に早く出す所の名産だといふ事です。

▼一指目を蔽へば太山も見えず。

人は心に塵ほどの迷ひがあつても、もう正しい道はわからず、分り切つた道理にも迷ふものです。少し人を疑ふ心があれば、その人のする事はすべて悪くとり、親切にしてくれれば何かもくろみがあるのではないかと思ひ、よく導い

て呉れれば何かわるい方面に落ちこまうとするのではないかと思ふやうな事があります。これは丁度小さな指一本で目をかくしても、大きな山が見えなくなるやうなものです。金に目がくれて悪い行ひをしたり、慾に目がついて親類や友だちと仲が悪くなつたりするのは、とりもなほさず、金や慾のために明るい心の目が蔽はれて盲となつたのです。

▼一杯は人酒を飲み、二杯は酒酒を飲み、三杯は酒人をのむ。

酒を飲む人を戒めた諺です。酒を飲む人は、はじめ二杯の中は心もたしかですが、飲みすぎるとおしまひには亂暴を言つたり、荒らい事をしたりして、失敗る事が多くあります。こんなのを人が酒を飲んだのでなくて人が酒に飲まれたのだといひます。

▼犬骨折つて鷹の餌食。

世の中は様々で、善い人もある代りに、悪い人も随分多くあるものです。自分が骨を折らずに人にばかり苦勞をさせておいて、その甘味はみんな自分が吸ひとつてしまつたり、人が骨折つて得た利益をまる切り横どりしてしまつたりするやうな事は、間々あるものです。

犬が兎などを追つて山をかけ廻り、骨折つた後やつとの事で追ひつめて捕りおさへ、まづこれで一安心と思ふ間もあらせず、鷹がやつて來でそれを横どりするといふことにたごへたのです。

イソツア物語に、こんな話があります。

或日獅子と狐とが共同して、山へ餌を探しに行きました。あちらこちらを餌を探して來て、二疋がこれを配ける事にしました。その時獅子は狐に向つて、「この食物はお前と二人でとつて來たのだから、半分は己れが貰はう。又おれは獸類の王だからその残りの半分を貰はう。そして又その残りは皆おれが貰は

う。これをお前が承知せなけりやお前の命は危いよ」かういつて狐はとうとう皆餌を獅子にとられてしまつたといふことです。こんなのを、犬骨折つて鷹の餌食といふのです。

▼言ひたい事は明日言へ。

深い考へもなく、ふと人の悪口をいつたり、怒つた時に前後の事も考へずじやうつかりものを言つて、後になつてから詰らぬ事をいつた、恥かしい事であつたといふ様な事はよく有るものです。

怒つた時などにものを言はうとするには、よくよく氣を落ちつけて、考へに考へた後でなければ口を開かぬやうにするのがよろしい。「言ひたい事は明日言へ」といふのも、言葉を慎むことをいつたものです。

* * * * *

▼牛にひかれて善光寺参り。

昔信濃の國の善光寺の近邊に、七十あまりのお婆さんがありました。このお婆さんは年よりに似合はぬ信心ぎらひの人で、まだ善光寺へ参つた事もありませんでした。或時、家の前に布をさらしておきました所が、隣りの家の牛が放れて来て、このさらしてゐた布を角に引つけて、ぎん／＼走つてにげて行きます。お婆さんは布を持つて逃げられては一大事と思ひ、牛のあとを追うてぎん／＼行きますと、牛はとう／＼善光寺の方へ来て、おしまひには寺の中へかけ込みました。お婆さんは寺の中まで追つて来て、はじめてそこが靈場であることを知り、それから後は度々善光寺に参詣して、後生を願つたといふことです。

この話がこの諺のおこつた始で、事を餘儀なくさせられることをいふのです。

▼牛の尻。

『物知り』といふことを『牛の尻』といつたのです。牛は「もう」と鳴くから、牛の事を「もう」といひます。それで『もうの尻』と『物知り』とを通はせたのです。

牛は水を飲んで乳とし、蛇は水を飲んで毒とす。

同じ一つの道具でも、又同じ智慧でも、これを使ふ人の善悪によつて、その仕事に善悪が出来て来ます。人が常々使つてゐる刃物も、悪人に持たせば時人を殺し、生活するのに一日も無くてはならぬ火も、疎忽な人に取扱はせて置けば時に大火事を起します。新聞紙の三面記事もよい人にはいしましめの修身書となり悪人には悪行の仕方を教へる教科書ともなります。

同じ水でも、牛はこれを飲んで人の滋養物となる牛乳となし、蛇はこれを飲

んで人を害する毒汁とするといふ意味の諺で、均しく智識を得ても、これを善用するものと悪用するものがあるといふ事です。

▼うそをつけば閻魔に舌をぬかれる。

閻魔は地獄の王で、死んだ者を調べ、善悪を賞罰する者であるといつてゐます。生きてゐる中に人を欺したりなごした人は、死んでから地獄へ行き、こゝで閻魔大王の命令によつて、青鬼や赤鬼のためは、釘抜やうのもので舌を引きぬかれるのであるといつてゐます。これは嘘をつくことをいませしめた諺なのです。

▼内股膏藥。

或る時、鳥と獸が大喧嘩をやりました。鳥の仲間も獸の仲間も、みんな揃つて出て来て大勢が戦をしたのです。その時蝙蝠は鳥にも似てゐるし獸にも似て

ゐますので、鳥が勝ちさうにあつた時には鳥の方へつき、獸の勢がよいと見れば又獸の方につきました。その中双方共仲直りをして喧嘩を止めました。そこで蝙蝠は鳥の方へいつて遊ばうとすると鳥の仲間は「お前は獸だらう。おれらの遊んでゐる所へ来るな」といつていぢめます。仕方がないので獸の方へ行くといふ話があります。

この蝙蝠のやうに、自分の損徳ばかりを考へて、あちらへついたり、こちらへついたりするやうな人を内股膏藥といひます。股の内側に膏藥を張つたら、あちらへついたり此方へついたりするからいふのです。

* * * * *

▼ 鵜の眞似する鴉水におぼれる。

或る日、一羽の鵜が川の中で魚をとつてゐました。鳥が木の上からこれを見
てますと、鵜は水の中へもぐると、間もなく浮んで來ます。見るとうまさう
な魚を口にくはへてゐます。それを食べると又水の中へもぐりこみ、暫くする
と又一びきくわへて浮いて出ます。それが如何にも面白さうでしたので、鳥も
一つやつて見ようと思ひ、水の中へ入つて見ました。ところが鳥は水の中へ入
れる鳥ではありませんから、がぶ／＼と水をのんで、とう／＼死んでしまひま
した。

自分の力で出来るか出来ないかも考へず、人のしてゐる事を羨しがつて、そ
の事をやらうとするやうな人は、この鳥と同じ人です。

* * * * *

▼ 馬の止動狐の困快。

物事をさかしまにしてゐる喻にいふ諺です。

馬を走らすのに止、止といひ、止まらすのに動動といふのは、言葉と動作と
が丁度反對になつてゐます。又狐の鳴く時、困困と聞くのは吉であるし、快快
となくのは凶であるといつてゐます。この事から、この諺が出來たのです。

▼ 梅は食ふとも核食ふな。中に天神寢てござる。

菅原道實は大そう梅の花が好きだつたので、今でも天神さまの社には梅の樹
を多く植ゑます。

生梅の種子の中には毒になるものが含まれてゐます。それで未熟の生梅の種
子を食へると中毒する事があるのです。それですからこの種子を食はぬやうに
中に天神様がねてござるから食てはいけないといふのです。

▼梅を語れば口中酢を生ず。

昔支那の魏の武帝が多くの兵士をつれて行軍をしたことがありました。暑い夏の最中のことゝて、日はぐわんぐゝ照りつけて汗が流れる、多くの兵士は大層喉が渴いて、水を欲しがりました。しかし生憎その邊には飲み水は少しもなく、喉を濕す事が出来ず、大勢の兵士は口々に渴いた事を天に訴へてゐました。その時その武帝は兵士に向つて『この向ふへ行つたら梅の木のあるさうだ』と話しました。皆の兵士は『梅』といふ言ばで、梅の事が思ひ出され、口に唾が出て来たため、暫くは咽の渴いたのも忘れたといふ事があります。酸い梅の實を噛む時には誰れでも唾は出て来ます。それで梅を食した時の事を思ひ出すと自然に唾が出て来ます。武帝はこれを應用して、大勢の兵士の渴を一時とめたのです。

▼飢ゑたる犬は棒を恐れず。

格言に、衣食足つて禮節を知るといふ事がありますが、人があまり困窮するど、前後も忘れ恥をもちへり見ず、恐ろしいものも恐ろしからなくなります。犬は、ふだんならば棒をふり上げた人などを見ると一目散に逃げてしまふのにひどく飢ゑてゐる時に食物に目がつくと、棒で叩かれるのもかまはず、腹を肥やさうとするものです。人がひどく貧乏すると、心まで卑しくなつて、耻を耻ともせぬやうになるも、これと同じ事です。

▼得手物で仕損ずる。

まだ慣れぬうちは用心してゐても、慣れて来るにつれ、上手になるに従つてとかく注意を怠り勝ちになり易いものです、これは油断と慢心のためです。人は如何に上手になつても慣れて来ても油断をしてはいけません。木登りの上手

な者が木の上から落ちて怪我をし、水泳ぐことの上手な者が水におぼれて死ぬやらかなことは、世の中に随分ある事です。

▼ 蝦魚で鯛つる。

少しの資本金を出して大きな利を得ようとするのをいひます。

▼ 燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや。

燕雀とは燕や雀のやうな極つまらぬ鳥、鴻は雁より少し大きくて羽毛の色は真白く、頸長くて肉も美であります。又鶴は水鳥で、これも雁より大きくて羽毛の色は真白く、共に立派な鳥です。

燕や雀のやうなつまらぬものは、立派な鴻や鶴の志を知つて居らぬといふ事で、つまらぬ小人は、立派な人の心を知つて居らぬのに喩へた諺です。

* * * * *

▼ 閻魔の塩からを嘗めたやう。

むづかしい苦い顔をするのをいふので「閻魔がだらすけのんだやう」とも

「閻魔が抹香食たやう」ともいひます。

▼ 落武者芒の穂におそれる。

昔支那の晋の國に、謝玄といふ人がありました。賊が攻めて來た時、兵をつれてこれを討ちましたが、多くの賊兵は戦争の末、さんく打ち破られて逃げかけました。賊兵はさんく逃げて行きましたが、八公山の近くへ來ました時その山の草木が風のために揺れてゐるのを見ては、「謝玄の兵が攻めて來たぞ」と大騒ぎをやつた事があります。

源平の戦の時、源氏十萬の兵と平氏五萬の兵が、駿河の富士川を挟んで、向ひ合つて陣をとつてゐました時、平軍の大將平維盛は、源氏の兵の強いのだ

勢なの上に、もうびく／＼もので、今にも攻めて来られはすまいかと、恐れて
りました。或る夜の事、大將も兵卒ももろ共に、そろそろと睡りかけた時分、
何にびつくりしたのか、富士沼に寝てゐた幾萬とも數知れぬ水鳥が、ごつと飛
び立ちました。何をいふにも幾萬の鳥が、羽音そろへて飛んだものですから、
その音はまるで大軍が鯨波をあげて攻めよせたやうでした。おち氣がさしてゐ
た平氏の軍勢は、この音を聞くより早く「すは敵軍が攻め寄せたぞ」と寢はけ
眼に鎧かぶと引きかつぎ、弓箭捨て、おくやら、裸馬に乗るやら、中には鎧も
着ずに馬にとび乗る者もあつて、我一と先へと逃げました。その時源氏の軍が
後からその跡へ来て『平忠清』と名を書いた鎧櫃を見て、

富士川に鎧は捨てつ墨染の

衣たゞきよ後の世のため

と詠んで笑ひました。武士の道具を捨てるからは坊さんにでもなつて墨染の

衣を忠清が着るのだらうと、あざけつたのです。又この時、誰れとも知らず清
盛の門の柱へ次ぎのうたを落書をしたものがありました。

富士川の瀬々の岩こそ水よりも

早くも落つる伊勢平氏かな

かういふ風に、人は恐れ氣がさしてゐると、何でもない草や木までが、恐ろ
しい物のやうに見えるものです。

落武者といふのは、戦にまけて逃げ落ちてゐる兵士です。それが敵の追手が
来はすまいかと、おそろしがりながら逃げてゐますと、芒の穂が動いてゐても
敵が居るのかとびつくりするといふのが、この諺の意味です。

▼お鬚の塵を拂ふ。

勢力ある人や目上の人御機嫌を伺ひ、追従する事をいふのです。

昔支那の魏萊公といふ人が、大臣となつた時、その下の役人に丁謂といふ人がありました。或時一緒に宴をした事がありました。その時、吸物の汁が萊公の鬚につきました。これを見た謂は、直ぐに立つて萊公の鬚を拂つたのです。すると萊公は謂に向つて『そんな軽々しい行ひをしてはいけぬ』といつて、いつてきかしましたので謂は大層はぢたといふ話があります。

この話から起つた諺なのです。

▼親をにらむと鰈になる。

鰈はだれも見えて知つてゐる通り、目が一方に二つついてゐます。これは、この魚が海の底の砂の上などに横になり、一方の側を下に向けてゐるものですが、一方の目は役に立ちませんので、下側の目が上側に移つて來たのです。然しこの鰈も幼い時は両方に目がついてゐますが、大きくなると一方の目が他の

一方へ來るやうになるのです。親は大事にして、顔色をやはらげて事へねばならぬのに、若し親に向つて怒つたり、親をにらむやうな事があると、その子は鰈のやうな者になるといつて、子供をいましめた諺です。

▼親苦子樂孫乞食。

よく世の中にはこんな事があります。

親が一生懸命になり、汗水流して働いて、やつこの事で一身代を作り上げてやれ、これで肩身も廣く世渡りが、出來るやうになつたと喜んでゐる。するとその子が、親のお蔭で何不自由なく暮せるものですから、米は家の藏から出て來るもの、金は家の篋笥の抽出に入れてあるもの位に思つて大きくなり、身代を増さうともせず、親からゆづり受けた財産で樂に世を渡つて行きます。しかしそれが孫の代になると、もうお祖父さんのこしらへ上げた財産は父の代に

なくなつてしまつてゐるし、それかといつて、父が樂に暮したお蔭で烈しい働きも出来ねば手についた職もないといふので、食ふに食はれず仕事をして金を儲けるにもその金儲の仕様も分らず、遂に乞食のやうなつまらぬものになつてしまはねばならぬといふ意味の諺です。

▼郷に入つては郷に従へ。

世の中の風俗は、土地によつてそれ／＼異つた所のあるものです。都會へいつて田舎者のやうな風をして居れば笑はれますが、田舎に居つてあまり都會者のやうな風をしてゐると、又人から笑はれます。言はずかひ、身なり、人との交際のし方、それ／＼處かはればちがつてゐるものですから、その地に居ればその地の風に従ふものだといふことです。

* * * * *

▼隠すより現はるゝ。

刑事調査などからよく聞く話ですが、人の物を盗んで家へ持ちかへり、隠してしまつてゐるものを探しに行くとき、盗んだ人は、どうかして見つからねばよいがと思つて、胸の中に心配で心配でたまりません。それでともすると隠してゐる所の方へ氣が引かれて、その方へ目が行くものですから、直ぐ調べつかれるのだといひます。

かういふ風に、餘り隠さうとすると、ごうしても人から考へつかれて知れるやうになるものです。この諺はそれを言つたものです。

▼賢ければぼけよ。

ほんとに賢い人であつたら、その人は決して賢ぶるやうな事はありません。賢くない人が却つて賢がりたがるものです。賢ければ賢くぶらずに馬鹿のや

うにして居れといふ事です。

これについて面白い話があります。

昔英吉利にゴタンといふ町がありました。或日國王が旅行の時に、この町を通るといふ事になりました。ところが、その時の王は大層ひどい人で、人民を困らすやうな事があつたものですから、ゴタンの町の人は、この王様のお通りをきらひました。そして人々がよつて相談をして、町の入口に澤山の木を伐つておいて、道々を塞いでしまひました。王がゴタンの町の近くへ來ると、路が塞いであるものですから大層怒つて通りかゝりの人に尋ねると、ゴタンの者がしたといふ事ですから、王は大層怒つて、ゴタンの民はすべて鼻を切りとつてしまへといふ命令しました。

ゴタンの人民はこれを聞いて、直ぐに相談をしました所が、その中にドビンといふ賢い人が居つて『皆が馬鹿の眞似をしてゐたら王はきつと罰せないだら

う』といつて、それから馬鹿の眞似をする事になりました。

役人がゴタンの方へやつて参りますと、老人どもが頻りに大岩を山の上へ押し上げてゐますし、若者どもは大勢それを見物して囃し立てゝゐます。

役人は、

『お前たちは何をしてゐるのだ』。

と尋ねますと、老人は、

『朝早く日が上つて、私らは眠たいのに起きねばなりませんから、この岩を山の上において、日が上つて來る邪魔をするのです』。

と答へました。

少し行くと今度は、多くの人が集まつて野原に石垣を積んでゐます。役人はまた、

『お前たちはこんな處にどうしようと思つて石垣をこしらへるのか』。

とき、ますと、その人たちは、

『此の野原に時鳥が一羽居るのです。それでその鳥が逃げないやうに、こゝに石垣をこしらへて圍つておくのです』。

と答へました。役人は笑ひながら、ゴタンの人間は何故こんなに馬鹿な事ばかりするのだらうと考へて、をかしくてたまりませんでした。少し行くとこんどは、背中に戸を負うて行く男に出逢ひましたので、又わけを問ひますと、

『私はこれから長旅をするのですが、家に澤山の金をおいてゐますから、盗人が戸を毀しては入るのが恐ろしいので、かうして戸を持つて行くのです。かうすれば戸をこはして盗人が入るやうな事はないでせう』。

といひました。

そこで役人共は、ゴタンの人民は馬鹿者ばかりだと思ふて、すぐ歸つて王に告げますと、王は『そんな馬鹿者ばかりの集りならば、追め立てたつて仕方が

ない捨て、おけ』といはれて、ゴタンの人は、鼻を切られることは許されま

▼ 稼ぐに追つく貧乏なし。

一休和尚の歌に、

精だしてかせげばいかで年の尾に

わが尾を見する事はあらしな

といふのがあります。又句に、

禾へんの家を出にけり貧乏神

といふのがあります。前の歌の意味は「精出して仕事をしておきさへすれば年の暮れになつて掛取に追ひつめられて困るやうなことが無い」といふ事、後のは禾へんの家といふのは稼ぐといふ字、それで、貧乏神も、稼ぐ家には居た

まらず逃げて出てしまふといふのです。

この諺もそれと同じことで、いかに貧乏が追つて來ても、稼ぎさへすれば追ひつく事はなく、家はいつも富んでゐるといふ事です。

歌に、

貧乏の神を入れじと戸を立て、

よくく見れば我が身なりけり

貧乏の棒もかせげばおのづから

振りまはしよくなるも世の中

▼可愛子には旅をさせよ。

俳句に、

いと愛しき子も旅させよ秋の鳥

といふのがあります。子が家にばかりゐると、親の愛になれて、氣まゝになり易いものです、よし氣儘にならなくとも、家にばかり居る者は、外へ出ればどれ程不自由なものか、どれ程心配なものかといふ、世の中のつらい事や難儀な事などがよくわかります。それで子が可愛いければ可愛い程旅に出して、世渡りの難儀を知らせて、子供の心と身體とを練つておけといふ事です。旅といふのは、たと道を歩くだけの事ではありません。家や親を離れる事で、故郷を去つて修學するのも旅なれば、親の家を去つて他家へ奉公に行くのもここにいふ旅です。

可愛子は打て。

可愛子は棒で育てよ。

といふ諺も、心はこれと同じ事で、子供が眞に可愛いければ、氣儘させずに嚴重に教へ育て、ゆけといふ事です。

▼金牛を驅りて路を開く。

昔支那秦の惠王が、蜀の國を攻めようと思つて、兵をつれて進んで行きました所が。道らしい道はなく、山や谷が重なつてゐるので進むにも進まれません。そこで惠王は謀をかんがへ出して、石を刻つて大きな牛の形をこしらへました。そしてその後には金の塊を置いて、それから蜀の王の所へ使をやつて、

『この牛は毎日金の糞をするが、蜀の國へ遣るからとりに来てはどうか』。とだましてやりました。すると蜀の王は慾ふかい人でしたから、それを本當だと思つて、貫つて歸りかけました。しかし道がわるくて中々容易に引いてかへれませんので、道を修繕して、山をきり開いたり谷をけづつたりして、やつとの事で蜀の都までもつて歸りました。このおかげで、これまで通る事もむづかしい位であつた道は、大層よくなつて來ました。

こゝに於て惠王は、これなら澤山の兵をつれて蜀の都へ攻め入る事が出来ると思つたものですから、さうくその道を通つて蜀の都へ攻め入りました。これからこの道のことを石牛道といふやうになつたさうですが、これは蜀の王が貪慾であつたために、惠王にだまされて自分で自分の國を弱らすやうな事になつたのです。

▼窮鼠かへつて猫をかむ。

さあ火事だといへば、ふだんひよろしくしてゐる弱蟲でも、意外の大力を出して、重い簞笥をかつぎ出したり、米俵を持つて走つたりしたといふ例は随分あります。所謂「命がけ」となつたら、人は餘程な大仕事もやつつけ、危険な事もなし遂がられるものです。小勢の軍が、大軍にかこまれて、必死となつて戦つた上句は、大軍を物の見事に打ち破つたといふやうな例は、昔の戦争にも

今の戦争によくあつた事です。

鼠は猫に捕られるもの捕られて食はれるものと相場はきまつてゐますが、さてその弱い鼠が猫に捕へられやうとして、最早逃げても駄目だと覺悟して猫に手向ひすると、流石の猫も鼠にかまれるやうな事は無いとも限りません。

この諺はこれをいつたものです。

▼ 杞 憂

杞人の憂ともいひます。役にたぬ心配のことをいふのです。

昔支那杞の國に一人の人がありました。この人は天が崩れ落ちて、身のおき處がなくなつたらどうしようかと、非常に心配して食物さへ食はずにゐました或人がこれを聞いて、天は積氣で落ちて來るやうな事はないものであるといつて聞かせました。するとその人は、天が積氣ならば日や月や星などが落ちて來

たらどうしようといつて、一層心配をしたといふことです。

この語はこれから出來たのです。

▼ 狐を馬に乗せたやう。

ぐら／＼と動き易いたとへにいつた事で、到底信用の出來ぬ事にいひます。

昔仁和寺の東に、高陽川といふ河がありました。この川の近くに、夕方になると、美しい娘の子が立つてゐて、馬に乗つてこゝを通る者があれば、その馬の尻に乗せて下さいと頼み、乗せてやつて四五町も行くと、馬から飛んでおりに狐になつて逃げる事が度々でありました。その頃御所を守つてゐる武士どもが集まつて、色々話をしてゐました序に、この高陽川の狐の事を話しました。するとその中に元氣な男があつて、その狐を捕へて來ようかと言ひますと、他の者は、否それは出來ぬであらうなぞ、言ひ争つてゐましたが、その男は、明

日の夜はきつと捕へて見せるといつてゐました。夜になつて馬に乗り、高陽川を渡つて京の方へ行きますと、案の状一人の娘が来て「京の方へ行くのですが日が暮れて恐ろしくて仕方ありませんから、その馬の尻に乗せて下さい」といひました。武士は「それは易い事、さあお乗りなさい」といつて馬にのせ、用意して来た縄で縛つて鞍に結びつけ、連れて歸つて同役の者と寄り合つて、炬火の火でふすべると、忽ち狐の姿になつたといふ事です。こんな話から、この諺が出来て来たのでせう。

▼金時の火事見舞

よく繪に見る金時の顔は、まつ赤な事まるで朱でも塗つたやうです。火事見舞などに行く人は、あはて、道をかけて行く上に、しかも火事場はあつたから、普通の人でも顔が赤くなりませう。

赤い顔の金時が火事見舞にでも行けば、それはく赤い顔になる事です。顔の眞赤なことを『金時の火事見舞』といつたり、金時の醬油焚ともいひます。

▼管の穴から天のぞく

『針の穴から天のぞく』とも『よしのずるから天のぞく』とも言ひます。小さな管の穴からのぞいた所が、見える所は極少しの部分で、それから天全體がどうであるとはいへません。

わけもわからぬ者が、えらい人のすることなどをかれこれいふのは、丁度管や針の穴から、天をのぞくのと同じやうだといふのがこの諺の意味です。

▼口が杯と親しくなれば身代は貧乏と親類になる

たびく酒の入つた杯を口に近づけて酒を飲んでみますと、貧乏神はその家

の身代を自分の親類のやうに思つて遊びに来ます。貧乏と親しくなるといふのは貧乏になることをいつたものです。
 わかり易くいへば、酒を多くのむ人は貧乏するといふ事、それを面白くからかつて言つたのです。

▼君子は危きに近寄らず。

塚原ト傳といふ人は大層劔術にすぐれた人でありました。或時百姓どもが、「馬を繋いだ後を通りかゝつて、馬に蹴とばされようとした時に馬の足を刀ひきぬいて斬り放つた強い武士があつた」といつて、大層その武士をほめました。これを聞いた者は皆その武士をほめるのに、ト傳だけは少しもほめず、感心した風もありません。
 そこで百姓どもは、ト傳を小面にくゝ思つたのが二三人言ひ合して、或る日

ト傳が他所へいつて歸つて来るのを見て、その通り路にあばれ馬の仕方のない奴をつないで置いて、ト傳がどうするか知らんと、木の蔭にかくれて見てゐました。

ト傳は何けなく來かゝりますと、向ふに大層乱暴らしく見える馬が繋いでゐるものですから、その道を通らず、他へまはり道をして通つて行つてしまひましたので、かくれてゐる者は、

「何の事だい、馬鹿々々しい」。

といひながら、あてが外れて物かげで顔見あはせました。

ほんとうのえらい人は、自分が危険だと思つたら最初からそんな所へは近寄りません。危険な所へわざと近よつて、大膽者の風がしたかつたりなどするやうな人は、眞の大膽なわけではありません。

* * * * *

▼愚公山を移す。

智慧がなくても、勉めて止まない時には遂にその目的を達することが出来る
といふ事にたとへたのです。

昔支那に愚公といふ九十近くの老人がありました。その家の前に太行、王屋
といふ二つの大きな山がありました。愚公は、自分の家はその山で塞がれて、
他所へ出て行くのにも面倒なので、この山をとりのけてしまはうと思ひました
そして子供たちをつれて、毎日箕でもつてその土を一ぱいづゝ、渤海へ運びま
した。すると智叟といふ人が、これを見て、大そう笑つて止めて云ふのに、

『お前はもうすぐ死んでしまふやうな老人ではないか、死ぬまで働いたつて
山の一毛もくづす事が出来ぬ。馬鹿な事は止すがよい』。

と。愚公は嘆息ついて、

『私は死んでしまつてもまだ子がある。その子が孫を生み、孫は又子を生む
かうして子々孫々なくなるといふ事はない。しかし山の大きさは決して大き
くなるものでない。とればとるだけ減つて行く。だから子々孫々相ついでや
れば何時かは山がなくならぬといふ事はない』。

といひましたので、智叟はだまつてしまひました。

或る神様がこれを聞かれて、その事を天帝に告げました。すると天帝は愚公
が熱心なのに大層感心なさつて、使に命じてこの二つの山をそれぞれ負うて遠
くの所へもつて行かされましたので、山は直ぐなくなりました。

世の中で、よく『才がある人だ』などいはれてゐる人の中には、智叟に似た
人があります。又、愚公のやうな事をいふと『あれは馬鹿だ』など、悪口をい
ふ人がまゝありますが、この愚公のやうな心であつたら、きつといつかは成功
します。

▼會稽の恥

昔支那の呉の國王に夫差といふ人がありました。父が越の國兵のために討たれて死んだので、必ず讐を討たうと思ひ、朝夕はいつも薪の中に臥し、人に命じて、

『夫差は越の人がお前の父を殺したのを忘れたのか』。

と言はせ、自分は讐うちの事を暫らくも忘れませんでした。かく辛苦したお蔭で、とう／＼後になつて越王勾踐の軍を散々に討ち破つて、遂に會稽山に圍みました。そこで越王の勾踐は色々頼みました。が遂に許されて國へかへりました。それから勾踐はごうかしてその恥をそゝがうと思ひ、苦い膽をかけておいて、毎日これをなめて『會稽山の恥を忘れたか』といつて、一日も忘れませんでした。後になつてとう／＼兵をあげて、呉王の吳差を討ち破り、會稽の恥

をそゝぎました。

これから起つた語で、忘るべからざる恥の事を、會稽の恥といふのです。

▼臥薪嘗膽

薪に臥し膽を嘗るといふことで、前條の事から出たので、色々苦心することにいふのです。

▼華胥の夢

支那に黄帝といふ天子がありました。色々苦心して、天下をうまく治めようとしたが、中々思ふ通りには治まらず、あまり心配した上句、わけもわからぬやうになりました。そこで政は全く捨てゝしまつて、遠く離れた所へいつて、靜かに心を養つてゐました。かうして三月程も政をとりませんでした。或時晝寢をして、夢に華胥といふ人の國に遊びました。その國はすべて

の事が皆自然のまゝであつて、人が憎み合うたり可愛がり合うたり、生きて居るのを喜んだり死ぬのを嫌がつたり、ものを欲しがつたり嫌がつたりするやうな事は少しも無く又この國にある雲や霧は目の邪魔にはならず、雷の音も耳を騒がすやうな事は少しもありません。黄帝はこの夢を見て目が醒めてから、大いに悟る所がありました。それから一心に政をやりましたが二十年あまりしてゐるうちに、天下は大層よく治まつて、まるで華胥の國のやうであつたといふ事です。

夢によい所へ遊ぶことを言ふ語です。

▼管鮑の交

昔支那に管仲といふ人と鮑叔といふ人と二人がありました。この二人は大層仲のよい友だちでした。或時管仲が歎いて云ふのに、

「私が若かつた時に、鮑叔と共に商をした。そして儲けた金を分ける時に、私はいつも多くとつて居つたが鮑叔は私を慾な者だと思はなかつた。これは鮑叔が私の貧乏な事をよく知つてゐたからである。又私が或時に鮑叔のために事をして失敗つたが、鮑叔は私を愚だと思はなかつた。これは時によつて物事がやくに立つ事と立たない事とがあるからである。又私が三度役について三度ながら主人から追ひ出されたが、鮑叔は私をやくざ人間だとは思はなかつた。これは私に運がむいてゐないといふ事を知つてゐたからである。又私が三度戦争して三度ながら敗けてしまつても、鮑叔は私を卑怯だと思はなかつた。これは私に老母があるから、その方の事を心配して、一生懸命に戦ふ事が出来ぬと思つたからである。その他私が人目から見れば耻と思はれる様な事をして、鮑叔は、私の眞の事情をよく知つてゐるので耻と思つてくれなかつた。鮑叔は實に私をよく知つてゐる眞の友だちである。」

といったたいふ事があります。

この事から、交りの仲のよい者を管鮑の交といふやうになりました。

▼下戸の建てたる倉もなし。

下戸とは酒をのまぬ人のこと。

酒を呑むものは酒代や肴代が、呑まぬ者よりはそれだけ多く入ります。これに反して酒のまぬものはそれだけ費用が入らぬ理窟です。それに妙なもので下戸が建てたといふ藏はないといつて、酒呑などは、獨りよがり下戸のことを悪口いひます。人の心は妙なもので、境遇や状態によつて知らず／＼の間に變つて行きますもので、酒を呑まねばそれだけの酒代などは残つて、財産がふえて行かねばならぬのに『自分は酒を呑まぬからこれだけの金は費つてもかまはぬ。これだけの事はしてもよい』といふ氣になつて來て、却つて普通の者より

も多くの費用が入るといふやうな事は、随分有り勝ちになるものです。これも心が弛んで來るからです。この心の弛み、油斷といふ事が人の成功をどれ程傷つけるかもわかりません。

▼玄田牛一。

畜生といふ隠しことばです。

玄田を合すると畜の字、牛一を合すると生の字です。

▼劔をおとして舟をきざむ。

昔支那の蘇の國に一人の男がありました。或時舟に乗つて河を渡つてゐますと、自分の持つてゐた劔が舟の中から水に落ちました。それでその男にはかにその舟に穴をあけて、暫くしてから舟が止まつたので、その穴から水の中に入りました。しかし劔は落ちたぎり其處に沈んでゐますし舟はずん／＼進んで

わたのですから、とても探すことは出来ませんでした。
この諺はこれから起つて来たので、その時に臨んでうまい智恵を出すことの
出来ぬものゝ事をいつたのです。

▼荆公の字を解くが如し。

昔支那宋の國に荆公といふ人がありました。文字を解釋する事が大層好きで
或人が覇の字は何故西冠にするのかと尋ねました。すると荆公は、
『西方は陰である。そして陰は物を殺すものである。春秋戰國の世にその覇
となつたものは皆殺伐であつた。それで覇の字は西冠である』。
といひました。すると或人が、覇字は西冠でない雨冠であるといふと、荆
公は、
『時雨のやうに人を化していく意で雨冠にしたのである』。

といひました。又東波といふ人が荆公に向つて、波の字のわけを問ひました
すると荆公は、

『波は水の皮である。それで波と書くのだ』。

と答へました。東波は、

『波が水の皮ならば、滑は水の骨か』。

といつて大笑ひをしたといふ話があります。

この諺はこれから来たので、勝手な解釋をして、誤の多いことを言つたので
す。

▼螢雪の功。

昔支那に車胤といふ人がありました。大層學問がすきで、何とかして立派な
ものにならうと思ひ、怠らずに勉強してゐましたが、家が大層貧乏で油を買ふ

事が出来ませんでした。それで夏になると囊の中へ數十匹の螢を入れて、これを燈火のかほりにして夜晝つゞけて一心不乱に勉強し、遂には立派な役人になりました。

又孫康といふ人は、若い時から心の美しい人でしたが、家が貧乏で油を買ふ事が出来なかつたので、冬の寒い夜、窓の下で雪にうつして本を読みました。かうして勉強した功で、後には御史大夫といふ立派な役人になりました。

この二つの故事から、勉強の功のことを「螢雪の功」といふやうになりました。

▼弘法も筆のあやまり、猿も木から落ちる。

弘法大師が天子から命せられて應天門といふ門にかける額を書いたことがありました。その時弘法大師は額を書いてこれをあげてから見ると、應の字の上

の點がぬけてゐます、それで大師は下から筆に墨をつけて、高い所にある額になげつけるご筆の勢はもとの字と少しもちがはぬやうに書けたといふ話があります。

弘法大師は、嵯峨天皇、橘逸勢と共に、我國の三筆といはれる程字が上手でその中でも弘法大師の字は特に正しいといはれてゐました。こんな人でも時々字をまちがへる事があるやうに、餘程その事に馴れてゐるものでも折々は仕損じがあるといふ事をいつたのです。

▼胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふ。

誰れでも故郷はなつかしくて忘れがたいといふ事をいつたのです。

胡といふのは支那の北方の地名、越といふのは支那の南方の地名です。胡の馬は、北の方から風が吹いて來ると、この風が故郷の地から吹いて來たのかと

思つて、故郷がなつかしくて嘶くし、越から來てゐる鳥は、自分の故郷の事を始終忘れずにゐますから、一本の木に巢をこしらへても、北の方にはせず、自分の故郷に面した南の枝に巢をこしらへるといふ事をいつたものです。

▼黒牛白犢を生む。

昔支那の宋の國に大層仁義を好む人があつて、三代の間もその心がかはりませんでした。或時この家に飼つてあつた黒い牛が、白い犢を生みました。それで何故かと思つて、これを孔子に問ひました所が、孔子は『これは吉いしるしである。神にそなへものをして祭つたがよいと言ひましたので、その通りになりました。ところが一年ばかりして、その父が、わけもないのに突然盲になつてしまひました。そしてゐる中にまたその牛が白い犢を生みました。父は又その子に言ひつけて孔子に問はせようと思はすと、子は『前に問うて盲となつたの

ですから、もう孔子に問ふ事は止めませう』といひましたが『聖人の言は初は違つても後には合ふ』といひましたので、子は孔子に問ひました。すると孔子はまた、それは吉いしるしであるからといつて祭らせました。所が今度亦一年ばかりして、その子が盲になつてしまひました。その後楚の國が、この宋の國を攻めて、城を圍みました。元氣ざかりの者は皆城に上つて戦ひましたが、その半分以上は死んでしまひました。しかるにこの盲の父子だけは、目がわるいので戦はずにゐて無事でした。そして敵が圍を解いてしまつてから、病氣はなほつて、元の明るい眼となりました。

この話は『塞翁が馬』によく似た話で、吉凶は定まりがなくて、吉かと思へばすぐ凶となり、凶かと思へば又吉となる事をいつたのです。

▼塞翁が馬。

昔支那の國界の塞の近くに馬に乗る事の上手な年寄が一人居ました。或時、とうしたものが、突然飼つてゐる馬が逃げてしまつて胡(支那北方のえびすの地)の地へ行つてしまひました。近所の人は皆氣の毒がつて、色々々悔みをいつてゐましたが、翁は別に惜しさうにも云はず、又何かの幸福が来るであらうなごと言つて居ました。暫くしてから後、その逃げた馬は、胡の國から大層よい馬をつれて來ました。そこで近所の人は皆、おめでたい事だといつて喜んでくれます、しかし塞翁は別に喜びもせず『どんな不幸な事になるのか知れぬといつてゐました。ところが、その家に良い馬がたくさん居るものですから、その子は大層馬好きになり、馬を乗りまはしてゐました所が、遂に馬から落ちて足(あし)の骨を折りました。近所の者は寄り集まつて、怪我をしたのを悔んでゐましたが翁は又、これが何の幸ひのものになるかもわからぬといつて平氣でゐました。その後一年ばかりしてから、北の國のえびす共が攻めて來ましたから、塞を守

つてゐた若者共はこれを防いで戦ひ、ほとんど皆死にましたが、翁の子だけは跛であつたので戦に行かずともすんで、父子ともに無事でゐました。

世の吉凶禍福は、めぐりめぐつて來るものですから、幸福だと思つてゐるとすぐ不幸な運命になつたり、不幸だと思つてゐるとすぐ幸福になつたり、するものです。このやうに幸と不幸とがまはつて來るのを『塞翁が馬』といひます。

▼酒と朝寢は貧乏の近道。

酒を多く飲み過ぎると、朝寢をするのとは、その家を早く貧乏にしてしまふといふ事です。

一日僅かの酒代も、これを年月に積めば大したものとなり、一日少しの朝寢も、これを月、年に積みば随分長い月日となるだけでなく、朝寢の習慣をつけると、すべての仕事も手早く出來かねて、なまくらになり易いものです。家を

富ますには、酒や朝寝は大の禁物です。

或る人の歌に貧乏神の歌として、

おのれやれ富貴になさでおくべきか

貧乏神の勅にたがへば

といふのがあります。貧乏神の勅を守らずに、酒も呑まず朝寝もせず、よく働くから、お前のやうな奴は、富貴な者にしてしまふぞと貧乏神が怒つた所なのです。朝寝したり酒をのんだりする人は、貧乏神の勅に従つてゐるのですから貧乏神は大層可愛がつて、その人をすぐ貧乏な者にするのでせう。

▼七を投げる。

物事に成功するといふ見込がなくて、その事を捨て、しまふことをいふので

醫者が病人をなほさうと思つて、色々七で薬をませたり診察したりして見ても、とても治りさうになくて、望みを絶つてしまつて、七を投げるといふ所から起つた語です。

▼竿竹で星を打つやう。

昔或る所に一人の男がありました。或る晩、門で長い竿をしきりにふり廻してゐました。するとそこへ一人の友だちが来て、

『おい、そんな所でたつた一人、長い竿を振り廻して一體どうしようと思ふのだへ』。

と問ひますと、その男は、

『空を見てゐると、星が大層美しく見えてゐるので、おれは星を二つ三つはらひ落さうと思つてゐるのだ』。

といひました。すると友だちは、

『お前は馬鹿な事をするものだなあ、そんな低い處から、いくらふり廻したつて、おちるものか。それよりはもつと高い屋根の上へ上つて拂つて見よ』
といつて、その男のしてゐる事を笑つたといふ話があります。男も馬鹿なれば友だちも馬鹿だつたのでせう。

自分が力の足らぬのも知らずに、出来ないやうな大仕事をやつて見ようとす
る人があるが、そんな骨折りはむだな骨折りだといふ意味の諺です。

▼三人よれば文珠の智慧

文珠といふのは智慧の神で凡ての佛の母といはれてゐます。

常の人でも、三人集まつて考へる時には、きつとよい智慧が浮んで来るものであるといふ事をいつたのです。

▼死ぬ死ぬいふ者に死しだためしなし。

口さきでよく言ふものは中々實行をせぬといふ事で、死にたいといふものにまだ死んだ者が無い事にたごへたのです。

インツブ物語にこんな話があります。

昔或る所に薪賣のお爺さんがありました。毎日毎日荷をかついで、町を賣つて歩くのが常です。今日もいつもの通りにあちこちと町中賣つてあるさまはりました。ところが、ごうしたものが、いくら晩方になつても少しも賣れません。お爺さんがつかりしてしまつて、

『あゝつまらない。世の中におれほど因果のわるいものは少なからう。この年がよつてから重い荷になつて薪賣りに來てゐるのに、今日なんかまだ少しも賣れぬ。あゝ人間なんてつまらぬものだ。いつそ死んでしまつた方が

いくらましかわからぬ。あゝ早く死にたいものだ、死にたいく。』

と、しきりに死にたがつてゐました。

すると死神がひよつくら目の前にあらはれて、

『そんなに死にたけりや、おれと一緒に来い』。

といつて、骨ばかりのやうな瘠せた細長い手を出して、お爺さんをつれて行

かうとします。するとお爺さんはびつくりしてふるくふるえ上り、

『え、飛んでもない。私はどんなに苦しくても、やつぱり生きてゐる方がよ

ろしうございます。御免なさいく。』

といひながら、薪もすてしまつて、両手で頭かへて一散に逃げ出してしまひました。

▼鹿を追ふ獵師は山を見ず。

昔支那の齊の國に、大層金を欲しがつてゐる人がありました。或時、市場へいつて、金を賣つてゐる店の前に立ち、側に多くの人のゐるのもかまはず、金をつかんで逃げました。役人は直ぐ追つていつてこれを捕へ、

『お前は何故大勢の人が傍にゐるのに金を盗んだのか』。

と尋ねました。するとその男は、

『私が金をとる時には、たゞ金ばかりが目について、人は少しも目につきま

んでした』。

と答へました。

獵師でも同じ事で、山の中で大きな鹿が飛び出すと、それよい獲物だといふので、その方ばかり氣をとられ、山がどうなつてゐようと、道がどうなつて居らうと、少しもおかまひ無しに、ごんごん追つてゆきます。

かういふ風に、人が自分の好きな事や、慾な事に目がつくと、もう心は働か

れてしまつてゐるものです。

『鹿を逐ふ獵師山を見ず、金をつかむ者は人を見ずとつゞけてもいひます。』

▼鹿を馬に通す。

昔支那に趙高といふ人がありました。この人が天子に反いて亂を越さうと思ひましたが、先づ多くの役人共が、自分を恐れてゐるかわないかを、探つて見ようと思ひ、或時一疋の鹿をもつて来て、それを天子に奉り、

『これは馬でございます。』

といひました。すると天子は笑ひながら、

『趙高お前はまちがつた事をいふ。これは馬はでなくて、鹿ではないか。』

といひながら、お側にゐる多くの役人に問はれました。役人共は黙つてゐる者もあるし、馬ですといふ者もあつて、皆趙高を畏れてそれにへつらひました

無理を押し通す事を、鹿を馬に通すといふのは、この事から起つたのです。

▼仕事幽霊飯辨慶、その癖夏瘡寒細り、たまさか肥えたらはれ病。

仕事をする時には、まるで幽霊か何かのやうに、ひよろ／＼してゐて怠惰の癖に、飯でも食ふ日には、強力の辨慶もびつくりする程よく食ひ、その癖に、暑さ寒さには身體が衰へて、夏は夏瘡をするし冬は冬で又瘡せてゐる、たまたま肥えたと思ふと、それは腫れる病で太つてゐるといふやうな風の、怠惰者の始末に終えぬ人をさげすんでいふ語です。

▼四 知。

支那に楊震といふ人がありました。或時、一人の人が、夜遅く錢を懐に入れて来て、

「誰れも知る者がありませんから、しまつておいて下さい。」
といひました。すると楊震は、
『天も知つてゐるし、地も知つてゐるし、おれも知つて居ればお前も知つてゐる。これでも誰も知つてゐないと言ふのか』。
と、一本きめつけました。その男は大層はちて、すどく歸つてしまひました。

▼七歩の才

詩や文を作る事の早いのをいひます。

昔支那の魏の文帝が、弟の東阿王にいひつけて『七歩あゆむ間に詩を作つて見よ。若し出来なかつたら罰を加へる』といひました。東阿王は、その聲に應じて、

煮豆持作羹

漉豉以為汁

箕在釜底然

豆在釜中泣

本是同根生

相煎何太急

といふ詩を作りました。文帝はこれを見て、非常に耻かしげにしてゐたといふ事です。

▼虱の生ずる所を争ふ

昔支那に東坡といふ人と、少遊といふ人とがありました。或夜東坡はあまり閑だつたものですから、少遊を呼んで酒を呑んで遊びました。丁度その時東坡は一疋の虱をとりました。そしてこれを少遊に見せて『この虱は垢から出来たものだ』といひますと、少遊は『いや、それは綿から出来たものだ』といつて二人が負けず劣らず言ひあつてゐました。果てはとうく、

『それでは明日佛印和尚のところへ行つて問はう。さうすればどちらの言ふ事がよいか分る。そして負けた方が勝つた方に一杯奢る事にしよう』。と相談がさまりました。この夜少遊は、東坡の家から歸る時、佛印和尚の許へたち寄つて、

『今日、東坡と虱の生れるもとを言ひあひましたが、東坡は垢から出来ることいひ、私は綿から出来るのだといつてやりましたが、中々勝負がつきませんから、明日あなたに問うて勝負をきめようと約束しました。どうか綿から出来るのだといつて下さい。さうすればきつと餛飩をおごりませう』。といひました。少遊が歸つて暫らくたつと、今度は東坡がやつて来て又前の少遊のいつた事を告げて『どうか垢から出来るといつて下さい。さうすればきつと切麥をおごりますから』といひました。

翌日になつてから三人が集まつて、虱の話が出て佛印和尚に問ひますと、和

尚は、

『それはわかり切つた事です。虱は、垢から體が出来、綿から脚が出来るのです。さあ、まづ第一に東坡さんに切麥をおごつて貰ひ、つぎに少遊さんに餛飩をおごつて貰ひませう』。

と、昨夜の事をうちあけて言つてしまつたものですから、三人とも手をうつて大笑ひをし、酒を呑んで楽しく遊びました。

▼白川夜船の高軒

何も知らぬ事を『白川夜船の高軒』といひます。昔一人の田舎者がありました。京見物に行つて歸つた時に『白川の流れはどうだつたか』と問はれました。田舎者は、わざ／＼京見物に行きながら、白川を知らぬといふも恥かしい事だと思つて、白川は夜船で通つたから、寝てゐてよくは知らなかつたと答へまし

た。白川は船は通る事が出来ぬのです。この事からこの諺が起つたのです。

▼節儉は臭い。

節儉するのは苦しい事をいつたのです。

昔一人の小僧がありました。この小僧は紙を粗末にしますので、或時和尚さんが呼んで、

「お前は随分紙を粗末にするが、これからもつと儉約して行かねばならぬ。世渡りをしていくには節儉が第一じゃ、紙一枚つかふのにも、先きに鼻汁をかねで後、便所へいつて尻を拭くのだ。これが節儉といふものじゃ」といつてきかせました。

暫く立つてからこの小僧、便所へ行きたくなつたので中へは入り、用がすんでから紙で尻を拭き、その紙でこんどは鼻をふきました。するとひどく臭いも

のですから、出て来てから、

「あゝ節儉といふものは何といふ臭いものだらう」。

と言つて、ため息をついたといふ話があります。これから起つて来た諺でせう。

▼炊白の夢。

妻を失ふ事をいふのです。

昔支那に王生といふ、よく占ふ人がありました。或る人が自分の故郷へ歸らうとしてゐる時に、臼の中で御飯をたいてゐる夢を見ましたので、これを王生につけて判断して貰ひました。すると王生は、

「あなたは、國へ歸られたら、妻君がなくなつて居るでせう。どうしてかといふと、臼の中で御飯をたくのは、これは釜（かま）がないからです。釜と婦

とは音が同じですから、きつと婦がなくなつてゐるのにちがひありません。といひました。その人が故郷へ歸つて見ると、果して王生のいつた通り、妻は死んでしまつたあとでした。

▼墨は餓鬼にすらせよ、筆は鬼にとらせよ。

墨をするには、力を入れずに静かにするのがよく、筆をもつて、字を書くには、勢をこめて筆をもつがよいからかういふのです。

支那人の語にも、

「墨をするには病夫の如く、筆をとるは壯士の如くす」。

といふのがあります。これと同じ意味です。

▼船頭多くして船中へ上る。

人が多くして却つて物事が早くはかどらぬ事をいつたのです。

船頭が多く集まつて、一つの船を操つてゐますと、皆の船頭がそれ／＼自分の思ふ通りにやらうと思つて、思ひ／＼に竿をつかふので、遂には全く方角もちがつてしまつて山の上へ上つてしまふやうな事になると、たとへていつたのです。

人には負けぬ氣があるために、おれが／＼と思つて自分の思はくを押し通して行かうといふ心があるものですから、多くの人が集まつて事をやつて行くには、心を協せてせなければなりません。自分の思ふ通りを押し通すと、思ひがけない失敗が出來たり、無やみにひまごつたりするものです。

▼梅檀は二葉より香し。

梅檀は印度地方にある樹で材によい香があります。このよい香のする木は、二葉の芽生えの時から、他の木と異つて勝れた香がある如く、後に立派な人と

なる者は、子供の時から人と異つて勝れた所があるといふ事です。

▼絶 纓。

夜、酒宴の席で、燭が俄に消えるのを、絶纓といひます。

昔支那楚の國の莊王が、多くの臣を集めて酒宴を開きました。その時酒宴の最中に、にはかに燭が消えて、あたりは眞暗となりました。その時、一人の美しい女がその場にゐましたが、一人の臣がこの美人の衣を引きました。美人はすぐに衣を引いた人の冠の纓を絶ち切つておいて、大聲をあげて、

『誰れか私の衣を引きました。それでその人の冠の纓を切りました』。

と、王に告げました。燭がついてから見れば、誰れが衣を引いたかがわかるのです。そこで王は、

『皆の人に酒をのましておきながら、禮儀を守らなかつたといつて、人を責

めるやう事は、大きらひである』。

といつて、そこにゐる臣の者に、冠の纓を皆絶ち切らしたあとで、燭をつけました。それで誰れが美人の衣を引いたか分かりませんでした。

この事から出来た語です。

▼竊鉄の疑。

昔支那に一人の男がありました。大事にしてゐた、鉄がなくなつたので、どうしたのか知らんと思つて、色々探して見ましたがわかりません。それでこの人は隣家の人が盗んだに違ひないと考へました。それからよく氣をつけて、その人のする事を見てゐますと、その人の言ふ事する事が、疑はしい事ばかりです。すから、この男は、てつきりこれが鉄盗人だと思つてゐました。長らくたつてから、この男が溝の中を掃除してゐますと、草の下から、その鉄が出て來まし

た。こゝに落したまゝ忘れてしまつてゐたのです。そこで此の男は、

『隣りの人を疑つたりしてゐたが、これは私が悪かつた』。

と思つてゐました。その後は、隣りの人のする事いふ事に氣をつけてゐましたが、少しも怪しい所はありませんでした。

かういふ風で、人を疑つて居れば何から何までが皆怪しいやうに思はれるものです。

▼精衛海を填む。

精衛といふのは小鳥の名です。

昔支那に炎帝といふ人がありました。この人の娘が、或る時東の方の海へ遊びに行きましたが、不幸にも、その女は水におぼれて死んでしまひました。この時發鳩といふ山に精衛といふ小さな鳥がゐましたが炎帝の女の子がなくなつ

たのを大層悲しんで、西の方の山から小石をくはへて来てはこれを東海にうづめ、又くはへて来ては海にしづめてゐました。この鳥はかうして海を淺くしようと思つたのでせう。

こんな話の事から、到底出来ない事をやりかけて、むだ力を費やす事のたゞへに『精衛海を填む』といふやうになりました。

▼蘇民將來子孫。

昔、素盞鳴尊が根刀國におくだりになつた時、雨や風が烈しくて大難儀をせられました。もうからだも疲れきつて、歩くのさへ大儀になつて來ましたので大勢の神さまに頼んでとめて貰はうと思ひましたが、神さま方は許して下さいませんでした。この時に、みたいの國に、蘇民將來、巨旦將來といふ二人の兄弟がありました。蘇民將來は家が貧乏でしたが、大層親切でした。又巨旦將來

は家が富んではゐましたが、親切な心は少しもありませんでした。素盞鳴尊はまづ初めに巨旦將來の家へいつて、宿をかる事を頼まれましたが、不親切ものの事とて、ことはつてしまひました。それから尊は蘇民將來の家へいつて頼まれますと、親切な蘇民の事とて、すぐ承知して心よく貸してくれました。その上蘇民は色々御馳走をして、大切にしたものですから、尊は大層喜ばれて、ごうかしてこの恩返しをしたいものであると思はれてゐました。丁度その夜あさわの國から惡病の鬼どもがやつて来て、その國の人民を亡ばさうとしてゐました。尊はその事を前から知つて居られましたから、蘇民に向つて、

『今夜はこゝへ惡病の鬼が来る筈である。もしそれに觸れるとすぐ死んだり惡病にとりつかれる。私はその惡病にとりつかれぬ法を知つて居る。お前たちの家の者は今夜皆、茅輪をかけて居れよ。さうすれば病氣になることはない』。

といはれましたので、蘇民はその通りにしました。その夜果して暴風が起つて何となく氣持のわるいやうな夜でした。あくる朝起きて見ると、巨旦の家の者は皆死んだり、病氣になつたりしてゐました。そこで尊が申されますのに、『これから後も、悪い病が流行する時には、お前の子孫は家の門に「蘇民將來子孫宿」と書き、かつ茅輪を門にかけておけよ。さうすれば決して悪い病氣にとりつかれるやうな事はない』。

といはれたと云ふ話があります。

こんな事から、後に惡病除けの印に『蘇民將來宿』といふ札をかけるやうになつたのださうです。

▼曾參人を殺す。

讒言もたび／＼重なる、つひには人を殺すといふ事です。之れを「投杼の

疑』ともいひます。

昔支那に曾參といふ賢い人がありました。この人が他所に行つてゐる時に、或る人が曾參の家へ来て、その母に、

『曾參は人を殺したといふ事です』。

と告げました。これは、その時に曾參と同じ名の人があつて、その人が人を殺したのでした。母は、

『うちの曾參に限つては、そんな事をするやうな馬鹿者でない。誰れか人がちがつてゐるのでせう』。

といつて、相かはらず機を織つてゐました。所がしばらくして、又一人の人がやつて来て、

『あなたの家の曾參は人を殺したそうです』。

といひました。曾參の母は、曾參はそんな事をする男でない、信じてゐま

すから、

『そんな事があるのですか』。

といつて、矢張り機を織りつゞけて、びくつともしませんでした。暫らくすると又一人の人がやつて来て、曾參が人を殺したといふ事を告げました。いくら我が子を信じてゐても、かう三人までが言ふものですから、とう／＼曾參が人を殺したのは本當だと思ひ、大層びつくりして、杼を投げすて垣を飛び越えて、走つて出たといふ事です。

曾參は大そう賢い人であるし、その母も大層曾參を信じてゐたのであるのに、三人までが之を疑はした時には、母もとう／＼曾參を信する事が出来ぬやうになりました。

すべての事がこの通りで、餘程信用してゐる人でも、多くの人の讒言にあふと、遂にはその讒言が本當に知られるやうな事があるものです。

▼ 宋襄の仁。

昔、支那宋の國の襄公といふ人が、多くの大名の上に立たうと思つて、楚の國の成王と戦ひをした事がありました。その時、或る人が襄公に向つて、

「楚の軍がまだ陣をはつて備をしてゐないうちに、こちらから攻め込んでや
りませうか」。

といふ者がありました。すると襄公は、

「人の道を知つてゐる者は、敵が用意もせぬ前に攻め込むやうな卑怯な行ひ
はせぬものだ」。

といつて、きゝませんでした。それから暫くしてから戦争をしましたが、宋の襄公の軍は、楚の軍のために、さんく打ち破られました。

世の人はこれを「宋襄の仁」といつて大層笑ひました。

この話から、つまらぬ情をかけてやつて、自分が却つて不利な目にあふのを
「宋襄の仁」といふやうになりました。

▼ 素車白馬。

人を弔ふ事をいふ語です。

素車といふのは塗つたり飾つたりしてゐない車の事、白馬は白い馬です。

昔、支那に范式、元伯の二人がありました二人とも大層仲のよい友達でした
が、元伯は病氣になつてとうとう死にました。その時范式は夢に、元伯が自分
を呼んで、

「私は何日に死んだから何日には葬式がある筈である。もし君が私を思つて
くれてゐるのなら、どうか葬式の間にあふやうに走つて来てくれ」。

といひました。そこで范式は直ちに着物を着かへて元伯の所へ行きかけまし

た。范式がまだ元伯の家へつかぬうちに、もう葬式は始まつて、死んだ元伯を入れた棺が家を出て墓場に向ひました。墓までいつて棺を下して壙に入れようと思ひましたが、どうしても棺が動きません。元伯の母はこの棺を撫でながら、

『元伯は何か思ふ事があるのか』。

といつて、棺をそこに置いたまゝ、待つてゐました。暫くすると向ふの方から、素車にのり白馬にひかせて、聲をたて、泣きながら范式がやつて來ました。そして范式が棺の引綱をひくと、棺は易々と動いて下ろす事が出來ました。

▼ 蓼くふ虫もすすきく。

蓼の葉のやうな辛いものを喰てゐる虫を、他の虫が見れば不思議に思ひませう。便所に居る蛆虫を他の虫が見れば、なせあんな臭い所に居るのかと可笑しく

思ひませう。

しかし蓼の苦い味が蓼の虫にとつては甘いのでせうし、便所の臭いのを何とも思はないのでせう。

人にもこれと同じやうに好ききらひといふものがあります。

自分は非常に醜いと思ふのに他人は非常に美しいと思ふものもあれば、自分が大層きらひな物を、他人が大層好むこともあります。

しかしこれらの事はその人々の好きくによるのですから、めつたに人の事は笑はれませぬ。他人から見れば又自分の事を可笑しがつてゐるかも知れませぬ。

句に、

好ききらひ世は様々や蓼の虫

* * * * *

▼**橙が赤くなれば醫者の顔が青くなり、橙が青くなれば醫者の顔は赤くなる。**

橙だいごがなつて秋あきすぎになるとだん／＼赤あかくなつて來きますが、これをちぎらず
 においておくと、春はるのくれになると又實みが青あせくなるものです。

秋あきや冬ふゆの冷ひややかな時節じせつには病人びやうじんが少すくないものですが、春はるさきから夏なつのやうな氣き
 候こうの暑あつい時には病人びやうじんが多おほいものです。

橙だいごの赤あかくなる秋冬あきふゆの頃ころには氣候きこうがよくて、病人びやうじんが少すくないので、醫者いしやにみて貰もら
 ふものが少すくく、そのため醫者いしやは金かねもうけが無なくて不満足ふまんぞくのために顔かほを青あせくして
 るます。これと反對はんたいに春はるすぎから、橙だいごの實みがだん／＼と青あせくなつて來きかける時
 分ぶんになると、病人びやうじんがだん／＼ふえて來きて、醫者いしやが忙いそがしくなりますから、醫者いしや
 は喜よろこんで赤あかい顔かほをしてゐるといふのです。

▼**たつ鳥あとを濁さず。**

自分じぶんの住すんでゐた處ところを去さつてしまふにも、あとに悪わるい名なを殘のこしておくやうな
 事ことはせぬものとの事ことをいつたのです。

水鳥みづとりが水みづの上に遊あそんでゐて、後のちにそこを飛とび去さつてしまふにも、もうこゝで
 自分じぶんは遊あそばぬからと思おもつて、清きよく澄すみ切きつてゐる水みづをいくら濁にごしておいた所ところが
 自分じぶんにとつては別段べつだん害がいにもなりません、そのやうな事ことはせず、あとの濁にごら
 ぬやうに飛とんでしまひます。

人もこの通りに、悪わるい名なを殘のこしておいたり、恥はぢになるやうな尊うんざを殘のこしておい
 て、去さりたくはないものです。

▼**旅の耻はかき捨て。**

これは丁度前ちやうどまへの諺ことわざの、

たつ鳥あとを濁さず

の反對です。旅に出れば、そこは顔も見知らぬ人ばかりで、自分の名も知られてゐなければ處も知られてゐませんから、いくら恥かしい事をした所が、その場だけの恥であるを考へて、顔もかまはず旅さきの地で、不面目な事をする者があります。かういふ人が恥かしい事をする時に口實としていふ語です。

▼道傍の苦李

誰れもとるものが無いといふ所から、人に棄てられたことにたとへて言ひます。

昔支那に戎といふ人がありました。年がまだ七歳であつた時に、多くの子どもと遊んでゐました。ふと向ふの方を見ますと、道ばたに一本の大きな李の樹があつて、澤山の實がなつてゐます。これを見つけた大勢の子供は、皆我れ勝ち

にと走つて行つて之れをちぎりましたが、たゞ戎一人だけは、その側へ行かうともしません。傍らから之を見てゐた人が、戎にわけを問ふと、戎は、

『道ばたのやうな人通りの多い處に、うまい李の實がなつて居れば、道通りの人がとつて食ふにきまつてゐる。それにあの樹にはあんなに多くの實がついてゐる、誰れもちぎらぬのを見ると、あの李はきつと苦くて食へぬのだらう』。

と言ひました。他の子がその樹から李を澤山とつて見ましたが、戎の思つた通り皆苦い李で、とても食はれませんでした。

この語はこんな話から起つて來たのです。

▼地獄の沙汰も金次第

昔支那に張斌といつて、極めて貧しい人がありました。崔といふ役人の家に

世話になつて、鞋などを作つて暮してゐましたが、信心深い男で、身を清めて念佛をとなへる事が度々でした。そして念佛の数を鞋の鬚で記をして、その記の鬚を澤山籠の中へ入れておいて、毎年、歳の暮れに地藏堂の前へもつていてこれを焚くことにし、数十年の間それを續けました。所が崔が大病にかゝつてどうく地獄へ行きました。そこで地獄の閻魔大王が恐ろしい眼をして、崔が生きてゐる時にやつた色々な悪い行ひを片つ端から數へあげて、その罪を責めました。そこで崔は、若し自分を娑婆に歸らしてくれたら、善い行ひをして、これまでに行つた悪い行ひを買ひとつてしまはうと申し立てました。これを聞いた閻魔大王は、お前が貯へてゐる錢などは、こゝでは何の役にも立たぬ。お前の家に世話になつてゐる張斌といふ奴は、よい金銀（念佛の事をさしていつたのです）を多くもつて居る。それで張斌の所へ、お前の錢一萬錢をもつていつて、張斌の錢と替へて來い。そうすれば罪を許してやらう。

常の人が心をこめた念佛は、一聲が金錢に相當するし、心をこめずに唱へた念佛一聲は銀錢に相當するのである。今からいつて張斌の念佛のうち、一萬遍を金錢一萬と替へて來いと言ひました。そこで崔は、張斌に金を與へて、紙に書いたものを出して僧を呼んで來てこの紙ぎれを焼き、念佛をして貰ふと、崔の罪は消えてしまつて病氣も共に全く癒えてしまひました。張斌は崔から貰つた金で大きな橋をかけて人の益になる事をはかり、その残りの金で一つの庵をたて、多くの人に接待をしたといふ話があります。

この話は坊さんが作つた作りばなしですが、この話から『地獄の沙汰も金次第』といふ諺が出來て來のたらうといふ事です。

▼月夜の道德坊。

うつつかりして人とか、奇妙な人とかいふやうな時に使ふ語です。

昔支那に楊隱之といふ人がありました。常に道士といつて、道教を修業する人の家をたづねて遊んでゐました。或る時、唐道士といふ道士をたづねて遊びましたが、それから二人は親しうなつて、唐道士は楊隱之を一夜泊めてやりました。夜になつてから唐道士は娘を呼んで、月を持って来いといひつけました。すると娘は奥へ入りましたが、暫くすると月を持つて来て、これを壁にはりつけました。よく見ると、玉のやうにも見えませんが玉ではありません。書かと思れば書でもありません。形から光までほんとの月と少しの違ひもなく、丁度曇つた夜の月のやうで、雲の中から薄い月の光がさして来てゐます。不思議に思つて見てゐると、暫くしてから道士は座を立つて月を拜み、今夜珍客がありますから、どうか光を明かにして、お照し下さいと言ひますと、壁の月は忽ち雲間から出たやうに、明るい光を放つて、室の中の燈火などはいらぬ程だつたといふ話があります。

こんな話から出て来た諺でせう。

▼強き木はむず折れ。

人に屈せぬ強い氣の人は、時には人から憎まれて思ひがけない不幸な目にあふ様な事があるといふ事をいつたのです。

イソツプ物語にこんな話があります。或日大風がひどく吹き荒れました。その時に風のために折られた櫛の樹の枝が、川の上を流れてゐますと、岸の近くの葦が、大風などは何時吹いたのかと云ふやうな風に、そよ吹く風になびいてゐます。櫛の木は、自分のやうな強いものでさへ折られてゐるのに、あんな弱い葦がなせ折られずに居るのかと思ひ、

『おい葦さん、君はなせゆふべの風にも折られずに居るのだ。僕のやうな強いものでさへ折られてゐるのに』。

と問ひますと、葦はにこ／＼笑ひがら、
 『風が吹いて来た時に折られまいと思つて君は頑ばるから折られてしまふの
 です。私たちは風が吹いて来ると、風のするまゝにまかしてゐるから折られ
 ません』。

といったと言ふ事です。この話もこの諺と同じ意味です。

▼使ふは使はるゝ。

人に使はれてゐるのに、たゞその人の命令によつて事を行つてさへ行けばよ
 るしいのですが、さて人を使ふといふ事になると中々むつかしいもので、その
 人の氣をいためてもならねば、仕事のはかどりが行かなくてもわるいし、色々
 な氣苦勞をせなければなりません。それで人を使ふのは、色々氣をつかひます
 から、却つてその人のために使はれてゐるのと同じやうなものだといふ事です

つまりは人を使ふ事の氣苦勞なのをいつたのです。

▲月にむら雲花に風。

世の中の事は、思ふ通りにならず、よい事があるかと思へばすぐに悪い事が
 出て来るといふのを、月が美しく光つてゐると黒雲が出て来て邪魔をしたり、
 花が美しく咲いてゐるかと思へば、そこへ風が吹いて来て、綺麗な花を散らし
 てしまふといつたのです。

▼朝三暮四の術。

昔支那に狙公といふ人がありました。猿が好きで、澤山の猿を養つて、これ
 を可愛がつてゐました。そこで狙公は猿の心もよく解るやうになるし、猿も亦
 狙公の心をよく解るやうにつてゐました。はじめのうちは、猿の欲しがらだ
 け食べ物をやつてゐましたが、俄に食べ物の分量を極めて少くやらうと思ひま

した。しかし若しさうすると、猿が怒りはせぬかと心配しまして、まづ猿をだまして言ふのに、

「これからお前たちに杼の實を極めて食べささうと思ふが、朝三つやつて夕に四つやれば十分だらう」。

といひました。すると猿どもは皆揃つて大層腹を立て、齒をむきだしましたそこで狙公は、

『それでは朝四つやつて夕には三つやらう』。

と言ひますと、猿どもは大喜びで頭を下げてお禮を言ひました。貰ふ分量は同じ事なのに、たゞ言ひ方がちがつただけで、猿どもは喜んだのです。

智慧のある人が、智慧のない者を誑すのは、これと同じ事だといふたとへです。それで詐つて人を弄ぶことを、朝三暮四の術といふのです。

* * * * *

▼ 田單の火牛の計

支那戦國の時代に、燕の國の大軍が齊の國に攻め入つた事がありました。この時齊の軍は散々打ち破られて多くの城は落ちてしまひ、はては王までも燕軍のために殺されてしまひました。残つてゐる城としては、たゞ莒と即墨の二城のみ、燕の運命ももう朝夕に迫つて來ました。この時齊の役人に田單といふ人がありましたが、即墨の人のために大將となつて、齊の軍を指揮する事になりました。田單將軍は、燕軍と最後の決戦をしようと思つて定めました。固より雲霞の如き燕の大軍に當るのですから、たゞの計では駄目だと思ひました。色々案の末、その夜あちこちから數千の牛を集めて來て、之れに赤い着物を着せて龍の紋を色どり、角には刀をくゝりつけ、尾には油をつけた藁を束ねて、おいて夜になつてからその藁の端に火をつけ、牛を燕軍の方に向けて放し

ました。これと共に城の中からは元氣な若士が鳴物ならしてどつと一時に攻めかけました。燕の大軍もこれには敵しかねて、散り／＼になつて逃げました。これに乗じて田單は、齊軍を指揮して大いに戦ひ、遂に落ちてゐた七十餘りの城をみんな取りかへしてしまひ齊の國は無事であつたといふ事です。

▼天から横に降る雨はなし。

日蓮上人の歌に、

心から横さまに降る雨はあらし

風こそ夜の窓はうつらめ

實にこの通りで、天から降つて来る雨は、はじめから横さまに降つて来て窓をうつのではありません。窓をうつやうに横さまになつて降るのは、これは風といふ邪魔物があつて、雨を横にむけるので、雨は横さまに降るやうになり、

夜の窓をうつやうになるのです。

人の心もこれと同じ事で、はじめから悪い心はないのに、途中でだん／＼と悪い事を見たり聞いたりして覚え、遂には悪人となつてしまふやうな事が随分あります。

よく氣をつけてこの邪魔物の慾心などをのける事につとめねばなませぬ。

▼鄭家の奴は詩をうたふ。

『勸學院の雀は蒙求をさえづる』といふのと同じ意味です。鄭家といふのは支那の鄭玄といふ人の家をさしたので、この人は大學者で、多くの書物を著したりなごしました。この人の家につかへてゐる下男のやうな、學問のないものでも、その家に化せられて、知らず／＼の間に詩でもうたふやうになるのと同じく人はことさらに習はなくても、周圍のものには自然に化せられるといつた

のです。
友だちをえらぶことや、住居をえらぶ事の大切なものこのわけに外ならぬの
です。

▼亭主を尻にしぐ。

婦人が、その夫に従はず、悔るやうなのをいひます。夫を夫として頭にいた
だかぬといふ所から、強くいほうために、頭にいたとく反對の尻にしぐといふ
のです。行誠上人といふ坊さんが、繪や歌の上手な女の人に、書いて見せたの
だといふ歌に、

歌をよむ女房などは持たぬもの

亭主を尻にしぐ島の道

といふのがあるさうです。敷島の道といふのは、歌を作ることなのです。

▼出遣より小遣。

一度の多く出す費用よりも、少しつゝ度々出す小遣が、目だちはしませぬが
澤山いるといつたのです。よく人は、あれは餘り安いから、一つ買つておかうと
か、一寸面白いものだから一つ買つて見ようとかいつて、價が安いために、又
金目が少いからといふので、さして必要なるものでもないのに買ふ人がありま
すが、かやうな費用が、目には見えませんが遂には財産をへらすやうな事にな
るのですから、よく儉約して、少しの金だからといつて、必要でもないものに
費すやうな事があつてはいけません。

▼手習は坂に車を押す如し。

徳川家康の歌だといふのに、
手習は坂に車を押す如し

油断をすれば後へもどるぞ

といふ歌があります。これは實に學問のいましめとなる事で、油断大敵といふのと同じことです。

車夫が重い荷をつんで坂を上るのに、峠近くまで汗水ながして車をひいて上り、今一步で峠といふ所になつて、少しでも油断をして力をぬくやうな事があつては、これまでの骨をつてひいて上つた坂道は、車が後へもどつてしまつて、又元の麓へ下りてしまはねばなりません。

よく世の中にはこんな事があつて、今一步力を入れたならば、立派に成功する所まで進んでゐながら、少しの油断のために、惜しい事にも失敗してしまつたといふ事は度々きく所です。

▼出る杭はうたれる。

杭の出すぎてゐるものは打たれるやうに、人も亦あまりに差し出るものは、人のために悪くいはれなごしてわざはひにあふといふ事です。

歌に、

さし出づる銚さを折れ幾度も

おのが心を金づちにして

といひがあります。

若し自分の心に、高ぶりたいと思つたり、威張りたいたいと思ふやうな事があつたら、心の金槌でそれをたつきつぶしてしまへといふ歌です。

▼同病相あはれむ。

世間の人がよくいふことですが、齒がひごく痛む時の痛さは、齒痛にかゝつた事のない人には、とても思ひ及ばぬといふ事です。人が病氣で苦しんでゐて

も、自分が経験のない病氣は、その人の眞實のつらさはとてもわからぬもので
す。それですから同じ種類の病氣にかゝつてゐる者同士は、お互に氣の毒がる
といふことをいつたのです。

何事でもこの通りで、自分が難儀な目にあつて、はじめて人の難儀がわかり
又それに同情をよせるやうになつて來るのです。

▼時にあへば鼠も虎となる。

さほどにはえらくない人でも、一度運がよくて時にあへば、立身出世して人
から敬ひ尊はれるやうな事があるといつたのです。

宗尊親王のお歌に、

虎とのみ用ひられしは昔にて

今はねすみのあな憂世の中

といふのがあります。これは一時は虎のやうに勢があつて、人から尊はれて
ゐたが、今は落ちぶれてしまつて鼠のやうな見るかげもないものになつてしま
つたといふ事です。

▼齋のやうには鼻さへそぐ。

齋といふのは、坊さんの食事のことです。

昔或る所に一人の坊さんがありましたが、この坊さん非常に鼻が長くて、御
飯をたべる時に、茶碗につかへて仕方がありません。それでも御飯をたべずに
生きても居られぬからといふので、とう／＼その邪魔になる鼻をそいで、短か
くしてしまつたといふつくり話があります。この事から出來た諺でせう。

さしあたり必要な事のためには、如何なる仕方でも又如何なる融通もつけて
事をするにたとへていつたのです。

▼處かはれば品かはる。

その土地、その國によつて、物や習はしちがつてゐるといふ事です。

物の名も處によりてかはるなり

難波の蘆は伊勢の濱萩

といふ古歌の通り、難波では『蘆』といつてゐるものも、伊勢へゆけば『濱萩』といつてゐるやうに、風俗習慣なども、所によつて變つてゐますから、自分の事や、近隣の事から考へて、むやみに他人の事や他國のことはわらはれま

▼年が薬。

諺に『馬鹿につける薬なし』といつて、馬鹿な生れつきの者は、どうしてもかしくなれぬといつてゐますが、生れつき少し智慧の足らぬやうな人でも

おひ／＼と年がよつて来て、長ずるに随つてその人の思慮も深くなり、自然賢くなくなつて來ます。それで馬鹿につける薬はないが、年が薬になつて馬鹿なものでもおひ／＼かしくなつて來るといつたのです。

▼年よりの言ふ事と、牛の尻がひ外れた事なし。

牛の尻がいは、一寸見れば外れてしまひさうにあつても中々外るものではありません。

年よつた人は幾ら智慧なくても、長い間の經驗をつんで、世の中のことによくなれて知つてゐますから、若い者がどうかと思つて疑ふやうな事でも、老人の言つたことにはめつたに間違つてゐる事はないといつたのです。

▼隣家の花は赤い。

自分の手元にあるものは、それほどよく見えぬが、人の家の物などは、大層

よく見えるといふ意味で、同じ色の花でも、隣家のは一層赤く美しく見えるといつたのです。

『隣家の飯はうまい』といひ『餘所の花赤い』といひ『隣家のシンドミ味噌』といひ、これらの諺は皆かなじ意味をいつたのです。

▼遠き慮なきものは必ず近き憂あり。

論語といふ書物にかいてある言はです。

後々の事をよく考へない者は、きつと近いうちに心配な事が起つて來るといふ事です。

人は目の前の事によく迷はされて、遂には非常な難儀な目にあふことがあります。

目前の楽しみをとげようとして、後の事も思はず財産をなくしてしまつたり

又人のそしりを受けて身のおき所がなくなつてしまふやうなことも、多くあるものですから、たと、今のことばかり考へず、行くさきの事を考へて身をつゝしませねばなりません。

▼燈消えんとして光を増す。

燈火が消える時には一度ばつと光がまして、すぐに消えてしまふことから、病人が最早死ぬまぎはになつて一時よいやうになる事や、家がたふれてしまふ間ぎはになつて、一寸榮えてゐるやうに見うけることをたとへたのです。

▼處得ぬ玉作り。

第十一代垂仁天皇の皇后の伯父君に、狹穂彦といふ人がありました。この人が謀反をしようと思つて、皇后を呼んで、

「今度自分はどうかして天皇の位につきたいと思ふ。若しうまく行けばお前

も大層仕合な身になれるのだから、どうかこれで天皇をお殺してくれ』
 といつて、短刀を渡しました。皇后はもとよりそんな悪い事はしたくありませんが、たつての頼みですから、ごうしてよいか途方にくれて居られました。その翌年の事、ある時天皇は、皇后の膝を枕にして晝寢をして居られましたが皇后はふと狭穂彦王から頼まれた事を思ひ出して、悲しくてたまらず、涙をお流しになりました。その涙が天皇のお顔にかつて、天皇は目をさまされ、
 『今夢に、錦色の小蛇が頸をまき、狭穂の方から大雨が来て、私の顔にかつた。こんな夢を見るのは何んのしるしだらう』
 と、申されました。そこで皇后は、大層恐ろしく思はれて、狭穂彦がたくらんである事を皆おつげになりました。天皇は、
 『それはお前が悪いのではない』。
 といつて、臣に命じて狭穂彦をおうたせになりました。そこで狭穂彦は、稻

を積んで城のかはりとし、一月からもこれを防ぎました。この時皇后は髪を剃つて、その髪で鬘をこしらへ、これを冠り、玉飾りは緒を腐らしてこれを手に巻き、又着物も酒で腐らしておいてそれを着、通常の髪、玉飾、着物のやうに見せて狭穂彦の城ににげて来て居られましたが、城に火をつけて官軍が攻めるものですから、天皇は人に言ひつけて、皇后と、皇后のつれて居られるお子様を救ひ出せと言はれました。使の人たちは皇后とお子様とを救ひ出さうと色々骨を折りました。皇后は御子様だけは助けて貰ひたいと思つて、その子を城の中からさし出されました。助け出しに行つた人たちは、そのお子様を受けとつて、皇后も一緒に連れ出さうと思ひ、皇后の髪を握りますと、その髪は鬘だつたものですから、すぐ鬘だけが離れてしまひました。しまつたと思つて、御手を握りますと、玉の緒が腐つてゐたものですから、又手が外れてしまひました。こんどは着物を捉へますと、着物も腐つてゐたものですから、捉んだ所

が破れてしまつて、とう／＼助け出す事が出来ませんでした。歸つてこの事を天皇に申し上げると、天皇は大層くやしがられて、皇后の玉をこしらへた玉作りが、わるい緒でこしらへてゐたのが、この不幸なもとなつたのだと、大層お怒りになつて、玉作りのもつてゐる土地を、みんな取り上げておしまひになりました。

この事から起つた諺だともいひますが、本居宣長といふ學者などは、疑はしとい言つてゐます。諺の意味は、賞を貰はうと思つて爲た事によつて、却つて罰を受けるといふ事です。

▼虎の威を借る狐

昔一疋の虎がありました。あちらこちらと歩きまはつて、たくさんけものの獸を捕つては食ひ、捕つては食ひしてゐましたが、或時一疋の狐をつかまへました。

この狐は大層悪がしこい奴で、虎に向つて、

「君はおれを食ふといけないよ。神様はおれに言ひつけて多くのけものの獸を大きくならしたのだ。それであるから君等が大きくなれたのも、おれのお蔭なのだ。それにおれを食たりなどすると、神様の罰が當るにきまつてゐる。若し嘘だと思ふなら君はおれの後からついて来て見給へ、他のけものの獸はみんな恐れてしまふよ」。

といひました。そこで虎は、

「それでは行いつて見よう」。

と言つて、狐の後からついて行きました。暫くしてから、多くのけものの獸に出逢ひましたが、自分らに目がつくと、どのけものの獸も、みんな逃げてしまひました。これは狐に恐れたのではなく、虎の姿が目についたから、びつくりして逃げてしまつたのです。

こんな話が支那の書物に書いてあつたから、この諺が出来たのです。
つまらぬ人や、ごく下役の者が、主人の威勢や、上役の威光で、むやみに威
張り散らすやうな事にたとへて言つたのです。

▼十で神童十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。

幼い時には人より勝れ、小學校などでもよく出来て、人の下になつた事のない子が、大きくなつて行くにしたがつて段々出来なくなり、二十歳頃になるともう普通の人と同じやうになつてしまふことがあるといふ事をいつたものです。

幼い時に感心な子だといはれ、勝れた子だと言はれてゐる者でも、あまり乗
氣になつて自慢心が出来、十分勉強せぬやうなつたりする者は、幼い頃にどれ
程人から感心しられてゐても、後にはきつと常の人とちがはぬやうになつてし

まふものですから、よく出来る子はよく出来るだけ油断せぬやうにして、十分
努めて行く事が大切です。

▼問ふは一度の恥、問はぬは末代の恥。

知らぬ事は知らぬ事として、之れを知つてゐる人に問ふのは少しも耻かしい
事ではありません。それに中には、問ふのが耻かしいとか、きまりが悪いとか
いつて、知らぬ事も問はずに一生そのまゝ暮してしまふ人があります。かやう
なのは末代までの耻だといふ事です。知らぬのに知つた風をしたり、知らぬ事
をたづねずに過ごしてしまへば一生無識で終らねばなりませんから、一時のき
まり悪さなどはかまはず、知らぬ事はどこまでも知るやうにつとめるのが大切
です。

* * * * *

▼泣き面に蜂

何かに困つて泣くやうな顔をしてゐる所へ、その顔をまた蜂かひごくさしたといふので、一つの不幸苦痛の上へ又不幸な事が重なつて来たといふ事。

▼啼く鹿も夢のあはせのまゝに。

「夢のあはせ」とは「夢のしる」といふやうな意味です。

昔一人の人がありました。或時その人の傍に二疋の鹿が寝てゐましたが、夜明がたになつて、牡鹿が牝鹿に向つて、

「おれは今夜夢に、白い霜が澤山ふつてゐて、おれの體中を眞白につゝんだ夢を見た。これは何のしるしだらう」といひました。牝鹿は暫く考へてゐましたが、

「あなたは今日外へ出ていつたら、きつと人に見つけられて、弓で射殺されるのにちがひありません。白い霜が體にかゝつたと云ふのは、あなたの體が料理しられて、白い塩につけられるしるしでせう」。

といひました。これを聞いてゐた一人の人は、妙な事もあるものだと思つてゐました。

暫くして、夜がほんのりとした頃、一人の獵師がやつて来て、遂に牡鹿を射殺してしまひました。

▼南郭濫竽

實力がなくて、いゝ位や役についてゐるのを「南郭濫竽」といひます。

昔支那の國に、南郭先生といふ人がありました。齊の王の宣王といふ人は臣の者を集めて笛を吹かす事がありました。いつも一度に三百人ばかりも一

緒に吹かしてゐました。南郭先生は自分は笛を吹く事は出来ないのに、これらの多くの人の中にまじつて、笛を吹く真似をしてゐて、王から祿をもらつてゐました。

そのうちに宣王はなくなつて、その子の文王が王になりました。或時この文王が多くの笛を吹く者に向つて、

『おれは、笛を聞く事は大層好きであるが、これまでの様に大勢一緒に吹かずに、一人一人吹くのを聞かう』。

と言ひました。そこで南郭先生は大びつくり、一人では吹く事が出来ませんので、とう／＼逃げていつてしまひました。それではじめて皆の人は、南郭先生が無茶をやつてゐたのだといふ事を知りました。

▼南柯の一夢。

人間の一生のはかなくて夢のやうだといふ事をいつた語で「邯鄲一炊の夢」と同じ意味です。

昔支那に淳于棼といふ人がありました。住んで居る家の南に、一本の古い槐の木がありました。或る時棼が酒をのんで、この槐の下に寝てゐて夢を見ました。するとまだ顔も見知らぬ二人の使が来て、

『私は槐安國から来た使でございますが、私どもの國の王が、是非あなたにお出逢ひしたいから、来て貰つてくれとの事で、只今お迎ひに参りました』。

と丁寧な頭を下げて申します。棼は二人の使のあとからついて行くと、暫くして穴の中へ入りました。入口には『大槐安國』といふ掛札が掛けてあります。奥へ入るとそこには國王が居まして、

『此の度そなたに来て貰つたのは、外でもないが、我が國の南柯郡が、どうも治まりにくくつて仕方がないので、そなたにその郡にいつて貰つて、政治

を頼まうと思つた次第である。さうかこの儀承知して貰ひたい』。
 この頼みです。勢はそれから南柯の郡守となつて其所へ行き、二十年ばかりも暮らしてゐましたが、そのうちに目がさめて見ますと、自分は槐の木の下に寝てゐるのでした。

この話から出来た語です。

▼無い／＼言うても有るものは風、ある／＼言うても無いものは金と化物。

冬頃などは、よく着物に風の居るもので、居らぬやうに見えてゐても、何時の間にか風がついてゐることがあります。又自分から金持らしく見せかけてゐるやうな人には随分貧しい人があり、又化物も世間では有るやうに言ひますがそんな者が實際にゐたことがありませんから、かういふのです。

▼長いものには巻かれる。

勢力の弱い者が、勢力の強い人のために左右せられるといふ事です。世の中に立つて行くには、どうしてもこれはのがれられぬ事です。長いものに巻かれるのが嫌ならば、自分から長い者になるのが肝腎です。

▼無いもの食はうが人の病。

無い物はほしいのが人の常だといふ事です。

人はめつたに得られぬ物を尊んで、いつも有る物は、利益のあるものでも軽んずるのは常であります。早い話が、金剛石や金が高くて、硝子や鐵が安價なものこのためです。澤山あれば左程くひたくも無い癖に、少し他家から貰つたりなどとすると、非常にうまく思つたり、食べたいと思つてゐる物がどうしても得られぬなどいふ時には、一層食べたくて仕方ないものです。

▼泣く口は食はれるが、笑ふ口は食はれぬ。

物を食べるに泣きながらは食へますが、笑ひながらはどうしても食べられるものではありません。

この事から、泣くやうな目にあつて辛抱するものには生活の仕方であつて、どうにか暮して食ふ事が出来ますが、忍耐力のなくて、始終浮いたやうな氣であるものには生活の道がなくて、食ふ事も出来ぬといったのです。

▼無くて七癖。

人には多くの癖があるもので、癖のない人だといはれるやうな人でも、七つ位の癖があるといふ意味です。又「無くて七癖、あつて四十八癖」ともいひます。

自分の考へでは、自分には癖がないと思つてゐても、知らずくの間、色

色可笑しな事をしてゐて人から見れば笑はれるやうな事がありますから、自分の身は、毎日よくかへり見て、行を修めて行くやうにせなければなりません。

▼情に向ふ刃なし。

よほどむごい者でも、情に向つて來られてはそれを無情にもひどい目にあはせるやうな事は出来ぬものですから、かういつたのです。

人情の大切な事をいつたものです。

▼夏の火は娘にたかせよ、冬の火は嫁にたかせよ。

姑と嫁とは中がわるいとは、昔から言つて來た事で、これは姑に嫁を可愛がれといふ意味の諺なのでせう。

夏火をたくのは、だれも暑くて好まぬことですが、冬ならば寒いから、火をたくにもさほど難儀はありません。それで、難儀な夏の火たきは、これを娘に

やらせて、樂な冬の火たきは、これを嫁にやらせよといったのです。嫁と姑の中も、両方の心の持ちやう一つで、よくもなり悪くもなるものですから、両方がお互に心をうまく持つて行くといふのが第一必要なことです。

▼七度たづねて人を疑へ。

物を失つた時などは、よく氣をつけてそれを尋ね求め、軽々しくあの人が盗んだのだらうなご、疑をはさむやうな事があつてはならぬといったのです。人を疑つて、後になつてから恥かしいと思ふやうな事は随分あるものです。

▼二卵を以て干城の將を捨つ。

昔支那に子思といふ人がありました。或る時衛の王の前へいつて、『苟變は中々立派な男ですから、一方の大將とするにはまことに適當してゐ

ます』。

と申し上げました。すると衛の王は、

『苟變が一方の大將に適した男であるといふ事は自分も前からよく知つてゐる。しかしあれは前に役人になつてゐた時に、人民から鶏の卵を二つづづ取りたて、食た事がある。それで自分はあれを用ひないのである』。

と申されました。そこで子思は、

『聖人が人を役につけて用ひようとするのは、丁度大工が木を使ふ様なもので、その劣つてゐる所はすて、長じてゐる所を用ひるものです。立派な材木に一尺や二尺腐つた所があるからといつて、よい大工はその材木をまるで捨て、しまふやうな事はしません。若し今あなたが、變が二つづづの卵を人民からとり立てたから、役につけぬとおつしやるならば、大工が幾か、へもあるやうな大きな立派な材木に、僅か一二尺の腐つた所があるからといふので

その材木を捨て、しまふのと同じ事です。今は戦國の世の中で立派な人を少しでもあげて用ひねばならぬのに、今二つの卵を取りたてた事があるからといふので國を守る立派な大將を用ひぬといふ事は實にお考へちがひでないかと存じます。かやうな事は隣國へ聞えさしては大いに衛の名譽をきすつけます。』

と申し上げました。そこで衛の王も成程と合點して、

『よくいつて呉れた。なる程お前の言ふ事は尤ものことだ。お前の教へを謹んでうける。』

といつたといふお話があります。

この事から、少しの過ちがあるためにすぐれてゐる人を用ひぬ事を、二卵を以つて干城の將を捨てるといふやうになりました。

干城の將といふのは、國を守る大將といふことです。

▼逃がしたものは大きい。

又『逃がしたものに小さいものなし』ともいひます。これは人情であつて、折角自分がとつた魚をとりにがしてしまへば、非常に惜しくて、實際よりは大きなものであつたかのやうに思ふものです。

「死んだ子はみめ好い」といふのもこれと同じで、可愛い子が死んでしまふと惜しくてたまらず、さほど美しくない子でも、餘計に美しかつたやうに思ふのが人の常です。

▼憎い鷹にも餌を飼へ。

自分が憎いと思つてゐるものに對しても、なほ好意をほどこせといふ意味です。

わるい事をしられて、わるい事をしかへすのは、心の曲つた人、わるい事をしられても、それを心にかけて捨て、おくのが、悪くもなく善くもない人、わるい事をしられても少しも怨まず、却つて恩をほごしてやるのが眞の善人です。悪い事をしられたからといって、すぐしかへしをしてをれば、いつまでも睨みあつて居らねばなりません、悪行をしられた人に、却つて恩を施してやる位にすれば向ふも耻かしく思つて、行ひをあらためるやうになるものです。

▼錦の袋に糠味噌を包んだやう。

又『錦の袋に馬糞を包んだやう』ともいひます。たと外がはばかり美しく立派に見せかけておいて、その内がはが美しくないものをかういつたのです。

學問もして居らずに學者らしくいつたり、えらくもないのにえらい者のやうな風をしたり、悪い行ひをしてゐながら、善人のやうに見せかけたりする人は

皆このやうな人でせう。

▼日光見ないうちは結構といふな。

日光は下野の日光で、東照宮徳川家康の廟地です。三代將軍徳川家光の時に天下の富を集めてこしらへ上げた社で、その美しい事は天下第一といはれてゐます。その日暮門などは、日が暮れるまで見てゐてもあかぬといふ程美しい門です。それでこの日光を見ないうちは「結構だ」といふなといつたので『日光』と『結構』とことばが似てゐるからかういつたのです。

▼二兎を逐ふものは一兎を得ず。

二疋の兎を二疋ながら捕らうと思つたら、しまひには一疋も捕れぬから、物事をするには一つの事に一心になれといつたのです。

▼盗賊の取り残しはあるが、火の取り残しはない。

火の用心をさすための諺です。

盗人が入つて家の中のものを盗み出した所で、そんなにすべての物をもつて歸るといふ事はありません。しかし火事はおそろしいもので、一度火事にかつたならば、家の物は残らず無くされてしまひます。それで盗人の用心もしなくてはなりません、それよりもなほ一層火の用心をせねばなりません。

▼盗人に鍵。

自分に害をあたへようとしてゐる者へ、却つて自分から便利を加へてやつて自分から害をまねくことをいつたのです。

* * * * *

▼盗人にも三分の理あり。

どんな事をするにも相應の理由があつてするのだといふ事です。たとひ盗みのやうなわるい事をするのでも、或は親に孝行をするにも金がないために、やむを得ずしたとか、或は人に借つた金をかへさねばならぬやうになつて、仕方なく盗んだとかいふ如きをさしたのです。

悪い行ひなどをして、それをいひわけするときに理由とする語です。

▼念力岩をも通す。

支那楚の國に熊渠子といふ人がありました。夜弓矢を持つて外を通つてゐますと、向ふの物かげに一匹の大きな虎が寝てゐます。熊渠子は直ぐに弓に矢をついで、ねらひ定めてひゆうと放ちました。矢はうまく中りましたので、すぐ

馳けていつて見ると、大き虎だと思つてゐたのは岩でした。矢は岩に中つて、矢の尖ごころか、羽の所まで入つてゐました。

又支那の李廣といふ人が、或時獵に出て、野原を通りますと、草の中に大きな虎が寝てゐるものですから、力をこめて矢を放しますと、ねらひはづれず虎の腹に中りました。すぐ側へ行つて見ると、虎と思つたのは大きな岩で、矢は岩に深く入つて、矢の尖の石は岩の中へ入りこんでゐました。あくる日、李廣は又この石を弓で射てみましたが、こんどは矢の尖さへ入りませんでした。

この諺は之れ等の話から出来て来たのです。

念力といふのは、心をその一點につよく集めて、他の事などは少しも思はず一心をこめる事なのです。心からその事につとめて、どうあつてもやりとげて見ようといふ、大なる熱心さへあれば、如何なる難事もやりとげられるといふ諺なのです。

陽氣發處

金石亦透

精神一到

何事不成

といふ、程子の語もこれと同じ意味です。

念佛無限、禪天魔、眞言亡國、律國賊。

日蓮宗でいふことばで、他の宗教の悪口をいつたものです、すなはち念佛をとなへるものは無限地獄へおちてしまひ、禪宗を信心するものは天魔となり、眞言を信心するものが多い時には國を亡ぼし、律宗を信心するものは、國の賊であるといつたのです。

寝てゐて牡丹餅食へぬ。

ダンテといふ人は、

『布團の上に坐し、夜具の下に臥して、名譽の路に達しがたし』。

といつてゐます。諺に『牡丹餅は棚にあり』といひます。うまい牡丹餅が棚の上に澤山ありましても、寝てゐてこれを食べ事は出来ません。これを食べふにはよろしく起き上つて手をのばしとつて口に入れなければなりません。立派な學者、實業家、軍人、それらは皆棚の上にある、牡丹餅と同じものです。これらを取らうと思へばよろしくそれを取るだけの骨をりを惜しまずにやらねばなりません。骨をりさへ出して買へば、如何なる名譽も身に得られんといふことは稀です。この骨をりををしむやうでは、とても立派な者にはなれませぬ。

▼能ある鷹は爪をかくす。

▼能なき犬の高吠。

共に意味は同じことで、實力のあるものは、むやみに威張り散らすやうな事

がなく、實力のないやうなものに限つて、自慢したり、えらさうにするといふことです。

實際に力があり智識があつたならば、自分から見せようとしなくても、自然に人は知つて來ます。しかしながら時には、自分の實力がみとめられなく、不幸な目に居らなければならぬやうな事も、ないではありませんが、それはいつまでもつとくものでなく、間もなく實力をみとめられて、世に出る事が出來て來ます。

智識のない人や、力のない人が、かれこれ人のことを悪くいつたり、自分の事を自慢したりする程みにくい事はありません。

▼のけて通せ酒の酔。

酒に酔うてゐるやうなものには、相手にならず、よけてゐるのがよいといふ

ことです。すべてわけのわからぬ者などには、少しもかまはずにおくのが一番よろしい。

▼呪ふ事も口から呪ふ。

吉凶の判断などは當てになるものでなく、人が吉といへば自然に吉となり、人が凶といへば自然に凶になるといふ事です。

昔支那に丁固といふ人がありました。或る夜夢に、腹の上に松が生えたと見ました。この夢を人に話して判断して貰ふと、その人は、

『あなたは今から十八年ばかりすれば、きつと公の位につかれませう。松といふ字は十八公と書きますから』。

といひました。後この丁固は果して公となりました。

又支那に孫董といふ人があつて、或る夜家の前に松が生えたといふ夢を見て

人に占つて貰ひますと、その人は、

『松は人を埋めた塚の上に植ゑるものですから、あなたは遠からず死にませう』。

といひました。果してこの人は、あまり長くとぬうちに死んでしまひました。

この二つの話から考へても、同じ松の夢を見てゐるのに、その判断の仕方は一方は出世するといふトひ、一方は死ぬといふトひで大ちがひですが、その判断どほりになつて行きました。これは皆人の口からきめたことだといふ意味です。

▼祖母育ちは三百文値が下がる。

「祖母育ちは三百文の損」ともいひます。

よく世間にある事ですが、お祖父さんやお祖母さんといふものは、孫でも出来れば大喜びで、それはそれはひごく可愛がることのあるものです。餘り可愛がりすぎると、悪い事をして叱らす、氣儘をいつても言つてきかさず、勝手に氣儘にぞだてるものですから、その子は大きくなつてから立派な人には到底なれません。こんな事から、お祖母さんに育て、貰つた子は三百文値段が安いなどといふやうな諺が出来たのです。

▼ 盃中の蛇影。

昔支那に樂廣といふ人がありました。

或時この人の家へ一人の客が来ました。これは樂廣に呼ばれて来た人です。

暫くして御馳走が出され、愈々酒宴が開かれました。樂廣は、

「失禮ですが」。

といつて、盃をさしました。波々つがれた盃の中を見てゐますと、これは不思議！ 一びきの蛇がまぼろしのやうに中にゐます。客は驚きました。そして、

『これはきつと己れを毒殺でもしよう』と思つて、こんな酒をのますのでは
ないか知らん』。

と心のうちに考へましたが、折角呼ばれて来てゐて、酒をこぼはるのをおか
しな事だと思ひ、嫌ではありましたが、こらへてぐつと呑みほしました。それ
からは何となく氣分がわるくて食物も進まず、そこ／＼にお禮をいつて歸りま
した。

家へ歸つてから愈々氣分はすぐれず、とう／＼病氣になりました。

樂廣は其の後客が一度も遊びに來ないものですから、どうしてゐるのか知ら
んと思ひ、或る時出逢つて譯を問ひますと、

「あなたの家で御馳走になつた時、盃の中に蛇がゐりましたが、嫌々ながら酒を頂戴してから以來、とうとう病氣になりました。」
 と言ひます。そこで樂廣は考へました「なる程あの時、酒を呑んで場所に、弓を壁にかけておいてゐた。その弓には漆で蛇の畫をかいてあるから、その畫の蛇が酒に映つたのに違ひない」かう考へて、
 『それでは御苦勞ですがもう一度あの場所へ来て頂きますせう。さうすればきつと譯がわかるに違ひありません』
 といひました。客は又何か悪い事をしられるのではないかと思ひながら、行つて見ました。
 元の場所へいつて、樂廣は盃をさして客に酒をつぎ、
 「どうですか？ 何か影が見えますか？」
 とたづねました。すると客は、

「見えます。前の通り蛇がゐるやうです。」
 と言ひますので、樂廣は立つて、壁の弓を示し、
 『あなたの盃の中に映つてゐる蛇は、この弓の畫の蛇が映つてゐるのです』
 といつて、譯を話しますと、客は成程さうだと考へついで、馬鹿な心配をしたものだと思ひました。これを聞くに直ぐ客の病氣はなほつてしまひました。
 世の中にはよくこんな事があつて、自分から疑つて、さうでないものまでをさうであるがの如くしてしまふ事があります。

『竊鉄の疑』とか『疑心暗鬼を生ず』とかいふ事も、みんな同じ意味です。

▼ 亡羊の歎

支那に楊子といふ人がありました。この人の隣に羊を一匹飼つてゐる人がありましたが、或時この大事の羊が、どこへ逃げたか無くなつてしまひました。

そこで隣の人は自分の家の者はじめ、楊子の家の子供までを頼んで来て、大勢で羊のあとを追ひました。楊子は笑つて、

『たつた一匹の羊を追つかけるのに、何といふ大勢で走るのだらう』。

といひますと、隣の人は、

『道が澤山に分れてゐるものですから、こんなに大勢が手わけして探しに行くのです』。

と答へました。

暫くたつてから、皆が歸りましたので楊子は、

『羊は探し當つたか？』。

と問ひますと、

『いゝえ、どうく逃がしてしまひました。何をいふにも、分れて居る道は又それ／＼多くに分れてゐるものですから、ごちらへ追つて行つてよいか、

さつぱりわかりませんでした』。

と隣の人が言ひました。

これを聞いた楊子は、

『道が多くに分れてゐてさうく羊を失つてしまつたが、勉強する者もこれと同じやうに、學問の道が多くに分れてゐるので、何も得る事がなくて遂には命を失ふのだ』。

と嘆いて言つたといふ事です。

これから、學問の道が多くて、何も得る所のない事を「亡羊の嘆」といふやうになりました。

▼齒墜ち舌存す。

支那に常縱といふ人がありました。或る時この人が病氣にかゝつて、臥て

ひますと、老子といふ人がいつて見舞ひました。

「先生はひどい病氣にかゝられたさうですが、萬一の事があつてはいけませんか、何か私ら弟子どもに教をのこしておいて下さいませんか」。

と申しました。

そこで常樅は自分の口を開き、老子に示して、

『この口の中に舌があるかどうか』。

と問ひますので、老子は妙な事をこはれると、をかしく思ひながら、

「御座います」。

と返事しました。すると常樅はまた、

「それなら齒は残つてゐるか」。

と言ひますから、老子は、

『一本も残つてゐません』。

と答へました。そこで常樅は、

「その通りだ。舌の残つてゐるのは何故だらう。いふまでもなく舌は柔かなからだ。齒の無くなつてゐるのは何故だらう。いふまでもなく堅いからだ」。

すると老子は俄に考へついたやうに、

「先生なる程その通りです。世の中の事はすべてが皆その通り、柔順なものは人から嫌はれるやうな事もなくて長く立つて行く事が出来ますが、人に反抗したり、ごかく世にさからはうとする者はさつと早く衰へ亡びます。私どもはこのお教へを長く忘れずにゐませう」。

といつたといふ話があります。

▼ 伯強の戒

言はず語らずに人を戒める事を『伯強の戒』といひます。

昔支那の伯強といふ人は、多くの弟子をもつてゐましたが、この弟子どもが悪い事をやつたり、過ちをした時に、自分がちやんと坐つて、その傍へ弟子を呼び、一言もものはいはずに形を正し、かうして一日中でも少しも動かすに居ます。それで弟子どもは大層これが恐ろしくて、悪いことをせぬやうに氣をつけたといふ事です。

この事から起つた語なのです。

▼鼻の下の長い者は長息する。

昔漢の武帝が、臣の者と共にいろ／＼な話をして居つた事がありました。この時武帝が、人相の事を書いた書物に、鼻の下の人中といふ所の長さが、一寸ある者は、百歳になるまで長息をすると書いてあつたと話しました。

この時、その座に東方朔といふ人がゐましたが、これを聞いて聲をあげて大

層笑ひました。そこで他の臣は、

「恐れ多くも帝の御前で聲をあげて笑ふとは、東方朔は誠に無禮者です」とつげました。これを聞いて東方朔は武帝に向つて、

「私が笑つたのは、あなたを笑つたものではありません。昔我國にゐた彭祖といふ人の顔は、どれほど長かつたらうと思はれて、思はず笑つたのです。」

といひますから、武帝はその譯をとひました。すると東方朔は、

「今人相の書物に、人中の長さが一寸のものは百歳まで生きると書いてあつた由、申されましたが、私がかつて人から聞いたり、書物の中でも見た彭祖といふ人は、八百歳まで生きてゐたといふ事です。若しその人が八百歳まで生きてゐたとすると人中の長さは八寸あつた割で、この割合なればその顔は定めて一丈ぐらゐもある事だらうと思ひますと、獨りでにをかしくなつて笑つたのです。」

と申し上げました。これを聞いた武帝はじめ、皆の者は一時にぞつと笑ひました。

▼白龍魚化して豫且に制せらる。

貴い人もつまらぬ人と共に居れば、賤しい者にも辱しめられる事をいつたのです。

昔支那の呉の國の王が、人民と共に酒宴をやらうと思つて臣に此の事をいひました。すると伍子胥といふ臣が進み出て申しますには、

『私がかねてかういふ話を聞いた事があります。昔一つの白龍がありました。が、下界の淵が青々として如何にも美しさうにあつたので、天からおりて来て魚となり、この淵で泳いで遊んでゐました。所がそこへ豫且といふ漁夫がやつて来て、弓でこの魚をうちました。そこで魚になつてゐる白龍は、命は

助かりました。目に傷を受け、びつくりして天へにげて上り、この事を神様へ申し上げました。神様は白龍に向つて『その時お前はどこにゐたのか』と問はれますから、白龍は『私は魚になつて下界の淵にゐました』と答へました。すると神様は『魚を人が射るのはあたりまへの事だ。それはお前が魚になるのが悪いので、豫且には少しの罪もない事だ』と申されたといふ話があります。白龍は神様につかへてゐる貴い動物であるし、豫且は宋の國の賤しい漁夫ですのに、白龍は魚になつてゐたため、豫且に射られました。

『今、あなたが帝の位を下りて人民と共に酒宴をなさるのは、丁度この白龍が淵へ下りたやうなものです。きつと何か心配事が出来るにちがひありません。どうかそんな事は止めて下さい』。

といつたといふ事です。この故事はこれから出來たのです。

▼背水の陣。

昔支那に韓信といつて、大層計略のうまい人がありました。この人が趙の國と戦争をした事がありました。その時自分の方の軍は、敵軍より少くうつかりして居ればめちや／＼にやられるかも知れぬと思ひましたから、計を考へて、後に河をひかへて陣をしました。若し敵に負けて逃げるやうになつた所で、後に河がありますから逃げられません、もし逃げたら後の河へ落ちて死ぬのですから、きつと命がけで兵士が戦ふにちがひないと考へたからです。兵士どもは、逃げて河へ落ちて死ぬか、敵と戦つて死ぬかどちらかであるといふので、命がけになつて大いに戦ひました。このため韓信の軍は大勝をして、さうさう趙王歇を擒にしてしまつたといふ事です。

こんな事から、命がけで事をやるやうな場合に、背水の陣をしつといふ語を

つかふやうになりました。

▼坊主憎けれや袈裟まで憎い。

ある人を憎んでゐると、その人のもつてゐる物まで憎くゝなつてくるといふ事です。

▼馬鹿と相場には勝てぬ。

馬鹿に相手になれば自分も馬鹿にされてしまつたり、相手が馬鹿なものですから、とりとめのない事をいつたりして勝てず、相場をして一時大金を儲けてもおしまひにはまけて大損をする事が多いのをいつたのです。

▼馬鹿と鉄はつかひやう。

鉄は使ひ手の使ひ方によつて、よくも切れたり切れなかつたりします。馬鹿のやうな者でも、使ひ方さへよければ色々なやくに立つといふ事をいつたので

▼箒をまたぐれば難産する。

これは女子に不法の事をせぬやうにいたしましたのです。何も箒をまたげたからといつて、難産するやうな事があるものではありませんが、女子は男子よりも一層たち居ふるまひをつゝしまねばなりませんから、箒をまたげるやうな不法なことをしてはならないといふいましめに、かういつたのです。

▼坊主の櫛貯。

坊さんは頭に髪がありませんから、櫛は何の役にもたちません。それに坊さ

んが櫛をたくはへておくのは無用のことです。それでこの諺は無用のものをたくはへたり、役にたゝぬことをしたりすることをいふのです。

▼バクヤの劔も持手から。

バクヤといふのは大層よい劔の名で、昔支那の呉の人の干將といふ者が、妻のバクヤといふ者と共に、二つの劔を作りました。その一つの劔はこれを干將といひ、他の一つの劔はこれをバクヤといつたのださうです。後々まで大層よい劔だといひつたへられてゐます。このよい劔も、持手がよければこそ名劔として價もあるし、切れ味もよいのですが、いくらよく切れる劔でも、持手がわるくては切れません。即ちこの諺はバクヤの劔も持手のよしあしによつて、よくも切れゝば、又よくも切れぬ。この通り、物は人のつかひ方によつて、ね

うちが出る事もあるし、ねうちの出ない事もあるといったのです。

▼走る馬にも鞭。

鞭は馬を走らすために用ひるものです。それに走つてゐる馬にも鞭をくはへるといふのは、その馬が油断をせぬやうにするのです。

人は、いくら勉強しかけてゐても、學問が出来上らぬうちに止めてしまつたり又油断をするやうな事があつては、これまでの骨をりも水の泡となつて、何の役にも立ちません。それですから勉強する上にも勉強して、心に少しの油断もないやうにやつてゆかねばなりません。すなはち走る馬にも鞭をくはへるつもりで、ゆるみのない自分の心にも、尙更たへず鞭をあてるといふことが必要です。

* * * * *

▼蜂の巢のこはれたやう。

蜂の巢に小石などをあてた時に、蜂があばれ廻るやうに、人が東西に走り廻つて騒ぐ事をいつたのです。

▼尾生の信。

つまらぬ約束を守つて、馬鹿な目に逢ふことをいふのです。

昔支那に尾生といふ人がありました。人と約束をして、或る橋の下で出逢はうといふ事をきめました。その時になつて尾生は、早くから橋の下へ行つて待つてゐましたが、約束した人はなかく来ません。その中に河の水が増して来かけました。それでも尾生は約束した事だからと思つて、其處をのかずにもますと、待つてゐる人も来ず、水はだん／＼増して来て、とう／＼水におぼれて

死んでしまひました。

▼鬚を染む。

昔支那に一人の役人がありました。だんくど年がよつて、もう鬚も白くなつてしまひました。

ある時この人が天子の前に出ました所が、いつもならば真白い鬚が、今日に限つて眞黒です。天子は不思議に思はれて、

「お前の鬚は今日に限つてなぜそんなに黒いのか」。

と問はれますと。するとその人は、

「私は薬で鬚を染めたのです」。

と答へました。天子は更に、

「何故染めるのか」。

と問はれますと、

「私は鏡を見て、鬚の白いのを見、年ばかり徒らに過ぎ去つてしまつて、天子様のおために盡す事が少いのを思つて心配をし、鬚をそめて天子様にお仕へする事が若かつた日のやうにしようと思つてからしてゐます」。

と申し上げました。天子は大層喜ばれたといふ事です。

この事から、年がよつてから若い者とともに居ようとするのを、かういひます。

▼人を呪はゞ穴一つ。

イソツプ物語にこんな話があります。

或る所に驢馬と狐とがありました。互に自分のためになるやうに又便利なやうにといふので、攻守同盟をして、他の獸を捕らうと思つて山へ出て行きまし

た。だん／＼と山の中を探しまはつてゐますと、びつくりした事には一匹の大
きな獅子に出くはしました。二疋とも大びつくりで、すぐに逃げださうとしま
したが、平常がするぬ狐の事ですから、逃げたつてとてもかなはぬと見てこつ
て、なれ／＼しく獅子のそばへ近よつて、

『もし私を見のがして下さるなら、あの馬鹿な驢馬を生けどりにしてあげま
せう』。

と、そつと囁きました。

すると獅子は、

『それならお前だけは許してやらう』。

といふ事になりましたので、狐は驢馬をつれて行つて、とう／＼計略で以つ
て、深いおとし穴の中へおとししまひました。夫れまで獅子はだまつて、狐
のする事を見てゐましたが、もう驢馬は逃げる心配なしと見ましたので、すぐ

狐にをどりかゝつて、たゞの一口に食ひました。そのあとで獅子はまた、驢馬
をゆる／＼と食つたといふ事です。

この話の狐のやうに、人が悪くなればよいがと願ふ様な者は、自分も亦ひと
いめに逢ふものです。「人を呪はゞ穴二つ」といふのは、この狐のやうな事
せう。

▼彼岸すぎでの麥のこやし、三十過ぎての男に意見。

麥に肥をやるのに、彼岸すぎでからやつた所がきゝめがありませんし、男も
三十歳を越えたものに意見をして見た所が、少しもきゝめがないといふ意味で
す。

人は子供の時から悪い癖がついて、それをなほさずにおけば、遂には直す事
が出来ぬやうになりますから、よく親や兄弟のやうに年上のもものは、年下のも

のを世話して、幼い時から善い方に導いてやらねばなりません。

▼人ある中に人なし。

歌に、

人多き人の中にも人ぞなき

人になれ人人になせ人

といふのがあります。

世の中にひとの数は實に多くありますが、さて本當に人の道をふみ行ふ、立派な人といへば極めて少いものです。人もこの立派な人にならなければ何にもなりません。子供の時からよく氣をつけて勉強し、仕事にはげんで立派な人になるやうに心がけねばなりません。

* * * * *

▼河豚さげて井戸覗く子を叱る。

『河豚は食ひたし命は惜し』といふ諺がある通り、河豚は大層うまいものですが、これには毒のある所があつて、若しまちがつてそれを食へると命を落としてしまふ様な事があります。それでこれを食へるといふのは随分危い事です。

これは一人の親があつて、その人は、これから河豚を料理して食べて見ようと思つて、河豚を下げてゐますと、向ふで子どもが井戸の中をのぞいてゐます。井戸を覗くのも危険な事で、もしまちがへば逆になつて下へ落ちて命を失ふやうな事もあります。井戸を覗くのも河豚を食ふのもどちらも危い事、それに自分か河豚を食はうとしてゐるのは柵へあけておいて、井戸を覗いてゐる者を叱るといふのは、自分の悪い事を捨て、おいて、人の悪い事ばかりをさがめる事

にたとへたのです。

▼ 鮒の念佛。

支那に莊子といふ人がありました。或る時、散歩してゐますと、道に車の通つた跡があつて、この中に一尾の鮒がゐました。莊子の通るのを見て聲をかけた、

「私はもう暫くすると水がなくなつて死んでしまひます。どうかお助け下さい。」

とたのみました。莊子は、

「暫らく待つて居るがよい。少しの水をお前にやるよりは、大川の水の方がよいだらうから、おれは今にその大川の水を傾けてしまつて、お前を迎へてやらう。それまでは少しのたまり水に辛抱して居れよ。」

といひました。すると鮒は、

「いえ／＼ございまして、私は大川の水なんか送つて貰つてゐては、それまでにごくに死んでしまひますから、大きな慾はありませぬ。それより一杯の水の方が私のためにはこれ程よいかわかりませぬ。」

といつたといふ、作りばなしがあります。

この事から、進退きはまつた時には慾も得も思はぬ事にたとへたのです。

▼ 不信の龜は甲をわる。

昔或る池に一匹のおしやべり好きの龜がありました。照りつゞいた夏の日にもう池の水は涸れがれになつて、いつ死んでしまふかわからぬやうになりました。だれか助けてくれるものがないかと、龜は毎日毎日短い首をのばして見てゐました。

二羽の鶴が空を飛んでゐますと、水の涸れた池がありますので、何かうまい魚でも居らぬか知らぬと思つて、下りて來ました。

少し残つた水の中で、誰れか來ぬかと待つてゐた龜は、すぐに首をのばして

「おゝ鶴さん、ごきげんよろしい」。

「これは龜さん、ごきげんよろしいか」。

暫らくして龜は鶴に、

「時に鶴さん、僕と君とは昔から鶴龜といつて、目出度いことにも一緒に言はれてゐるものです。それに、今は大旱魃で、このまゝ行けば私の命は今日か明日にもなくなつてしまひます。どうか私を助けて、水の多い所へつれていつて助けて、くれませんか」。

と、涙を流して頼みます。鶴も大層氣の毒に思つて、

「はんたうにお氣の毒な事です。私は空を高くも低うも心のまゝに飛ぶ事が

出來て、春は地の上の草木の美しい若緑の葉やよい香のする色々な花も見る事が出來ますし、夏は濃緑に茂つた野山を見る事が出來ます。秋は錦を織つたやうな美しい紅葉の山々がながめられ、冬は綿をしいたやうな美しい雪の野山や、氷がはつて鏡のやうな川がながめられて、自分の思ふ所は見られぬといふ事はありません。それに君らは何時もこんな小つぼけな池に居て、世間を知るといふ事はありません。君が申されるまでもなく私どもは、君を水のある所へ連れていつてあげませう」。

といひますから、龜は大よろこびで、

「どうかよろしう頼みます」。

といひました。鶴は、

「併し困つた事には龜さん、僕らは君を負ふ事は出來ず、さればといつて抱く事も出來ねば又口にくはへる事も出來ません。考へて見るに君は木の枝の

中央をくはへて居るし、僕らが二人してその両端をくはへて飛んでいくより他に仕方がないと思ひます。しかし若し君か僕らが一口でもものを言ふと、君は落ちてしまふが、元來君はよくしゃべる方ですから、餘程よく氣をつけぬといけません。どうですかこの事ができますか』。

とたづねますと龜は、

『連れて行つてさへ下されば、決して一口も言ひません』。

と言ひます。そこで龜に一本の木の端切れの中程をくはへさし、二羽の鶴は両端をくはへて飛び上りました。だん／＼飛んで行きますうち、龜はあちらこちらを見てゐますと、まだ一度も見つた事のない山々や野原や、さては人家田畑などの美しい景色を見て氣をとられ、

『こゝは何處ですか』。

と問ひました。鶴も忘れて、

『こゝですか……』。

といふうちに、龜はもう木を離れて落ちました。鶴は、

『あれ／＼』。

といふうちに、地の上へ落ちてしまつて、甲をわられて死んでしまひました。この事から起つて來た語で、約束を守らぬ龜は甲をわつたといふ事で、おしやべりは身を亡ぼす事のあるにたとへたのです。

▼傳粉の疑

昔支那に平叔といふ人がありました。この人は大層美しい人で、顔も甚だ白うございました。魏の文帝がこの人を見られて、

『平叔はきつと白粉をつけてゐるにちがひない』。

と心のうちに思つてゐました。